明遍僧都は藤原通憲の息

第十六巻

〔第一段〕　詞書

高野の僧都明遍ハ、少納言通憲の子なり、」長門法印敏覺か嫡才として、三論の奥旨を」きハめ、才名世にゆるされたりしかとも、名利を」いとふ心ふかくして、本寺のましはりをこのます、」つゐに三十七のとし、交衆をのかれ、公請を辭し、」光明山に居をしめて、諸行をすてす、万善」をいとはす、ひろく出離の要路をたつね、あま」ねく顕密の勤行をいたされけり、时の人、」明遍ハ當时無雙の碩學なり、轉任遅ゑの」ゆえに籠居する欤のよし、をの〳〵おしみあひけ」れハ、生年四十五の时、少僧都を宣下せられけ」れとも、かたく辞して勅喚にしたかハす、隠」遁のおもひいよ〳〵切にして、建久六年五十」四歳にて、なかく光明山をすてゝ、跡を高野」山にかくし、出離のつとめます〳〵ねんころなり、有智」の道心者、ちかくハこの人なり、」

釈文

高野の僧都明遍は、少納言通憲の子なり。長門法印敏覚が嫡弟として、三

光明山に入る

高野山に遁世する

論の奥旨を窮め、才名世に許されたりしかども、名利を厭う心深くして、本寺の交わりを好まず。遂に三十七の歳、交衆を逃れ、公請を辞し、光明山に居を占めて、諸行を捨てず、万善を厭わず、広く出離の要路を尋ね、あまねく顕密の勤行をいたされけり。時の人、明遍は当時無双の碩学なり、転任遅々の故に籠居するかの由、おのおの惜しみ合いければ、生年四十五の時、少僧都を宣下せられけれども、固く辞して勅喚に従わず。隠遁の思いいよいよ切にして、建久六年五十四歳にて、長く光明山を捨てて、跡を高野山に隠し、出離の勤め、ますます懇ろなり。有智の道心者、近くはこの人なり。

〔第二段〕　詞書

僧都、上人所造の選擇集を披覧して、この」書のおもむき、いさゝか偏執なるところありけり、」とおもひて寝られたる夜の夢に、天王寺の」西門に、病者かすもしらすなやみふせるを、一人」の聖の、鉢にかゆをいれて、匙をもちて病人の」口ことにいるゝありけり、誰人にかあらんとゝふ」に、かたハらなる人こたへて、法然上人なりと」いふと見てさめぬ、僧都おもハく、われ選擇集」を偏執の文なりと思つるを、いましめらるゝゆ」めなるへし、この上人ハ、機をしり、时をしりた」る聖にておハし

けり、病人の樣ハ、ハしめには柑子、」橘、梨子、柿なとのたくひを食すれとも、のちに」ハそれもとゝまりぬれハ、わつかにおもゆをもちて」のとをうるをすハかりに、命をかく、この書に、」一向に念佛をすゝめられたる、これにたかハす、」五濁濫湯の世にハ、佛法の利益次才に減す、」このころハあまりに代くたりて、我不かありさま、」たとへハ重病のものゝことし、三論法相の柑子、橘」もくはれす、真言止観の梨子、柿もくハれねは、」念佛三昧のおもゆにて、生死をいつへきなり」けりとて、忽に顕密の諸行をさしをきて、専」修念佛の門にいり、その名を空阿弥陀佛とそ」号せられける、とりわき天王寺と見られける」も、由緒なきにあらす、この寺ハ極樂甫處の」観音大士、聖徳太子とむまれて、佛法をこの」國にひろめ給し寂初の伽藍なり、欽明天皇」の御ために、七日の念佛をつとめたまひ、」命長七年二月十三日、黒木の臣を御使として、」善光寺の如來へ御書を進らる、その御」ことハには、名号七日稱揚已、以斯為報廣大恩、」仰願本師弥陀尊、助我済度常護念、と侍けるに、」如來の御返報にハ、一日稱揚無恩留、何況七日大功」徳、我待衆生心無間、汝能済度豈不護とそあそハ」されける、御表書にハ、上宮救世大聖の御返事」と侍けり、この御消息にこそ、この國ハ」念仏三昧の有縁なる事もあらはれ」にけれ、かの鳥居の額にも、釋迦如來轉法輪所、」當極樂土東門中心、とそかゝれて侍る、わか國」に生をう

けむ人ハ、尤もこの念佛門に」歸すへきものなり、」

釈文

明遍、選択集に偏見を抱く

僧都、上人所造の『選択集』を披覧して、この書の趣、聊か偏執なるところ有りけり、と思いて寝られたる夜の夢に、天王寺の西門に、病者数も知らず悩み伏せるを、一人の聖の、鉢に粥を入れて、匙を持ちて病人の口ごとに入る有りけり。「誰人にかあらん」と問うに、傍らなる人答えて、「法然上人なり」と言うと見て覚めぬ。僧都思わく、我『選択集』を偏執の文なりと思いつるを、戒めらるる夢なるべし。この上人は、機を知り、時を知りたる聖にておわしけり。病人の様は、初めには柑子・橘・梨子・柿などの類を食すれども、後には、それも止まりぬれば、僅かに重湯をもちて喉を潤すばかりに、命を繋く。この書に一向に念仏を勧められたる、これに違わず。五濁濫漫の世には、仏法の利益次第に滅ず。このごろは余りに代下りて、我らが有様、例えば重病の者のごとし。三論法相の柑子・橘も食われず、真言止観の梨子・柿も食われねば、念仏三昧の重湯にて、生死を出ずべきなりけりとて、たちまちに顕密の諸行を差し置きて、専修念仏の門に入り、その名を空阿弥陀仏とぞ号せられける。とりわき、

夢で上人に戒めらる

空阿弥陀佛と号す

観音菩薩の化身・聖徳太子、善光寺如来へ御書を進められ、如来より御返報あり

西門島居の額の銘

極楽の東門

天王寺と見られけるも、由緒無きにあらず。この寺は、極楽補処の観音大士、聖徳太子と生まれて、仏法をこの国に広め給いし最初の伽藍なり。欽明天皇の御ために、七日の念仏を勤め給い、命長七年二月十三日、黒木の臣を御使として、善光寺の如来へ御書を進ぜらる。その御言葉には、「名号、七日称揚し已んぬ。これをもって広大恩に報ぜんがためなり。仰ぎ願わくば本師弥陀尊、我が済度を助け常に護念したまわんことを」と侍りけるに、如来の御返報には、「一日称揚するだに恩留まること無し。何ぞ況や七日の大功徳をや。我れ衆生を待つこと心に間て無し。汝能く済度せよ、豈護らざらんや」とぞあそばされける。御表書には、「上宮救世大聖の御返事」と侍りけり。この御消息にこそ、この国は念仏三昧の有縁なることも表われにけれ。彼の鳥居の額にも、「釈迦如来、転法輪の所、極楽土の東門の中心に当たるべし」とぞ書かれて侍る。我が国に生を受けむ人は、もっともこの念仏門に帰すべきものなり。

〔第三段〕　詞書

上人、天王寺におハしけるとき、僧都善光寺」参詣の事ありけるか、たつね奏せられて、まつ」使にて案内し給ふに、上人客殿に出まうけて、こ」れへと仰らる、僧都さ

しいりて、いまた居なをらぬ」ほとに、このたひいかゝして生死をはなれ候へき、と」申されけれは、南無阿弥陁佛と唱へて往生」をとくるにハしかすとこそ存候へ、と申されけれハ、」僧都申さるゝやう、たれもさハ見をよひて侍り、」たたし、念佛のとき心の散乱し、妄念のおこり候」をハいかゝし候へきと、上人のたまハく、欲界の散地」に生をうくるもの、心あに散乱せさらんや、煩悩具」足の凡夫、いかてか妄念をとゝむへき、その條ハ、源空」もちからをよひ候はす、心ハちりみたれ、妄念ハき」をひおこるといへとも、口に名号をとなへハ、弥陁の」願力に乗して決定往生すへし、と申されけれは、」これうけ給候ハむために、まいりて候つるなりとて、」僧都やかて退出し給にけれハ、初對面の人、一言も」世間の礼儀の詞なくして、退出せられぬることよ」とて、人〳〵たうとひあひけり、上人うちへいり」給て、心をしつめ、妄念をこさすして念佛」せんとおもハむハ、むまれつきの目鼻をとりハ」なちて、念佛せんとおもはんかことし、あなこと〳〵」し、とそ仰られける、」

明遍、天王寺で上人に念仏往生のことを聞く

釈文

上人、天王寺におわしける時、僧都善光寺参詣のこと有りけるが、尋ね参らせられて、まず使にて案内し給うに、上人客殿に出で設て、「これへ」と仰

南無阿弥陀仏と唱えれば往生す

心の散乱は、弥陀の願力にすがる外なし

せらる。僧都差し入りて、いまだ居直らぬほどに、「この度いかがして、生死を離れ候べき」と申されければ、「南無阿弥陀仏と唱えて、往生を遂ぐるにはしかずとこそ存じ候え」と申されければ、僧都申さるるよう、「誰もさは見及びて侍り。ただし、念仏の時心の散乱し、妄念の起こり候をば、いかがし候べき」と。上人宣わく、「欲界の散地に生を受くる者、心豈散乱せざらんや。煩悩具足の凡夫、いかでか妄念を留むべき。その条は、源空も力および候わず。心は散り乱れ、妄念は競い起こるといえども、口に名号を唱えば、弥陀の願力に乗じて、決定往生すべし」と申されければ、これ受け給い候わむために、参りて候いつるなりとて、僧都やがて退出し給いにければ、初対面の人、「一言も世間の礼儀の詞無くして、退出せられぬることよ」とて、人々貴び合いけり。上人、内へ入り給いて「心を鎮め、妄念起こさずして、念仏せんと思わむは、生まれつきの目鼻を取り放ちて、念仏せんと思わんがごとし。あな事々し」とぞ仰せられける。

〔第四段〕　詞書

その後ハ、僧都ふかく上人に歸し、専修の行をこ」たりなかりけるか、念珠をハやく、りて、数遍お」ほき事をハ、不實のきハまりなりとて、おほきに」不受せられけ

るに、あるとき修行者一人きたりて、」毎日の念佛ハ、いかほとをか所作とさたむへく候覧、と」たつね申けるに、御房ハいくら程を申さるゝそ、と」かへしとはれけれハ、毎日百万反を申よしを荅ふ」るに、例の不実のものよ、とて返荅にも及ハすして、」うちへいられにけれハ、修行者も歸にけり、僧都ちと」まとろみ給へる夢に、貴けなる僧きたりてつ」けての給ハく、毎日百万遍の行者をいひさまたけ」ぬる事、はなハたしかるへからすとて、もてのほかなる」氣色にて、われハこれ善導なり、と仰らるとみ」ておとろきぬ、遍身にあせなかれ、胷さはきて、」心のをきところなきまてかなしくおほえて、」時刻いくほとをへさりけれハ、かの修行者をよひ」かへして、このよしをかたり、前非をくゐんために、人を」方〻にわかちつかハしてをハせられ、高野中をたつ」ねさせらるゝに、つゐに行かたをしらすなりにけり、」僧都申されけるハ、日來はやくりの数反を不受」する事、佛意にそむけるゆへに、化人のつけしめ」されけるなり、實の修行者にハあらさりけりと」て、其後ハみつからもつねに百万反の数遍をそ」せられける、僧都の夢想をもちてこれを思に、」上人数反をすゝめ給へる事、あに和尚の尊意」にかなハさらんや、たゝあふきて信をとるへ」し、をろかなる心をもちて、これをあさける」事なかれ、」

明遍、はじめは早繰りの数遍を不実の極まりとて認めず

毎日百万遍の念仏者を侮る

夢中に善導から侮りを正される

釈文

その後は、僧都深く上人に帰し、専修の行怠り無かりけるが、念珠を早く繰りて、数遍多きことをば、不実の極まりなりとて、大きに不受せられけるに、ある時修行者一人来りて、「毎日の念仏は、いかほどをか所作と定むべく候らん」と尋ね申しけるに、「御房は、幾らほどを申さるるぞ」と、返し問われければ、毎日百万遍を申す由を答うるに、例の不実の者よとて、返答にも及ばずして、内へ入られにければ、修行者も帰りにけり。僧都ちと微睡給える夢に、貴げなる僧来りて告げて宣わく、「毎日百万遍の行者を、言い妨げぬること、甚しかるべからず」とて、もっての外なる気色にて、「我はこれ善導なり」と仰せらると見て驚きぬ。遍身に汗流れ、胸騒ぎて、心の置きどころ無きまで悲しく覚えて、時刻幾程を経ざりければ、彼の修行者を呼び返して、この由を語り、前非を悔いんために、人を方々に分かち遣しておわせられ、高野中を尋ねさせらるるに、ついに行方を知らずなりにけり。僧都申されけるは、「日来早繰りの数遍を不受すること、仏意に背けるゆえに、化人の告げ示されけるなり。実の修行者には非ざりけり」とて、その後は自らも常に百万遍の数遍をぞせられける。僧都の

夢想をもって、これを思うに、上人数遍を勧め給えること、豈和尚の尊意に適わざらんや、ただ仰ぎて信をとるべし。愚かなる心をもちて、これを嘲ることなかれ。

〔第五段〕　詞書

僧都、ひとへに上人の勧化を仰信し、ふた心なし」かりけれハ、上人の滅後にハ、かの遺骨を一期の」あひた頸にかけて、のちには高野の大将法印」貞暁、鎌倉右幕下息相傳せられけり、籠山三十年の」あひた、朝にハ自誓戒、舎利講、夕にハ臨終の行」儀を修し、惣して六時の同音念佛、日ゝ夜ゝに」をこたる事なし、他のためにハ、人のゝそみにし」たかひて、顕密の法門を談せられけれとも、」自行には、一向稱名のほか他事をましへす、長」斎持戒にして、草菴をいつることなし、練行」としふりて、薫修日あらたなり、さても穢土」の縁つきて、西土の望ちかつきけるにや、貞應」三年四月上旬のころより、いさゝか風痾に」をかされ、寝食例に違しけれハ、門弟ハをの〳〵」結番して看病をいたし、念佛のこゑ」やむ时なし、病にしつむといへとも、法門談儀」日ころにかはらす、日をふるまゝに経論の明文」を誦して、念佛いよ〳〵強盛なり、つゐに」六月十六日子刻、頭北面西にして、念佛」相續し、禅定に入かことく、

いきたえ給に」けり、生年八十三なり、みる人随喜の感涙」をなかし、きく人在世の徳行をそし」たひける、」

釈文

僧都、ひとえに上人の勧化を仰信し、二心無かりければ、上人の滅後には、彼の遺骨を一期の間、頸に懸けて、後には高野の大将法印（貞暁、鎌倉の右幕下が息）相伝せられけり。籠山三十年の間、朝には自誓戒・舎利講、夕には臨終の行儀を修し、惣じて六時の同音念仏、日々夜々に怠ること無し。他のためには、人の望みに従いて、顕密の法門を談ぜられけれども、自行には一向称名のほか、他事を交えず。長斎持戒にして、草庵を出ずること無し。練行年経りて、薫修日新たなり。さても穢土の縁尽きて、西土の望み近づきけるにや。貞応三年四月上旬のころより、いささか風痾に冒され、寝食例に違しければ、門弟等各々結番して看病をいたし、念仏の声止む時無し。病に沈むといえども、法門談義日頃に変わらず。日を経るままに、経論の明文を誦して、念仏いよいよ強盛なり。ついに六月十六日子刻、頭北面西にして、念仏相続し、禅定に入るがごとく、息絶え給いにけり。生年八十三なり。見る人随喜の感涙を流し、聞

一期の間、上人の遺骨を首にかく

自誓戒、舎利講、臨終行儀、六時同音念仏、一向称名、長斎持戒

頭北面西、念仏相続して往生す

く人在世(ひとざいせ)の徳行(とくぎょう)をぞ慕(した)いける。

〔奥書〕

十六巻析帋数廿二丁

四十八巻繪傳　知恩院常住

第十七巻

〔第一段〕　詞書

安居院の法印聖覺ハ、入道少納言通憲の」孫子、法印大僧都澄憲の真弟なり、穀山」竹林房の法印静嚴を師とす、論説二道を」かねて、智辯人にすくれたりき、しかるに」宿習のいたりにやありけむ、ふかく上人の化」導に歸して、浄土往生の口決をうく、大和」前司親盛入道、御往生の後ハ、疑をたれの人」にか決すへき、と上人にとひたてまつりけるニ、」聖覚法印わか心をしれり、との給へり、浄土」の法門にをきて、所存をのこされさる事し」りぬへし、されハ、かの法印一巻の書を制作」して、ひろく念佛をすゝむ、世間に流布して」唯信抄と号するこれなり、かの書云、罪ふか」くハいよ〳〵極楽をねかふへし、不簡破戒罪」根深といへり、善すくなくハ、ます〳〵弥陁を」念へし、三念五念佛來迎といへり、むなしく」身を卑下し、心を怯弱にして、佛智不思議智」を疑事なかれ、たとへハ、人たかき岸のした」にありて、のほる事あたハさらんに、ちから」つよき人岸の上に有て、綱をおろして、」この綱にとりつかせて、われ岸の上に引登」せむといはんに、ひく人のちからをうたかひ、綱

の」よハからん事をあやふみて、手をおさめて」これをとらすは、更に岸の上にのほるへから」す、偏にその言にしたかひて、掌をのへて」これをとらんにハ、即のほる事を得へし、」佛力をうたかひ、願力をたのまさる人ハ、菩提」の岸にのほる事かたし、只信心の手をのへて、」誓願の綱をとるへし、電光朝露の命、芭」蕉泡沫の身、わつかに一世の勤修をもて、」忽に五趣の古郷をはなれんとす、豈ゆる」く諸行を兼んや、諸佛菩薩の結縁は、」随心供佛の朝を期へし、大小經典の」義理ハ、百法明門の暮を待へし已上略抄、」とそ待める、この法印、ふかく上人の勸化を信敬」のあひた、處〻にして説法のたひことにハ、弥陁の本」願を讃嘆し、念佛の功能をほめ申されけるを、上」人きゝ給て、これひとへに善導の御方便、機感純」熟の折節也、然へき名僧、専修念佛の義を信」して、所〻にして講尺せは、念佛の弘通何事」か如之哉、と悦仰られて、法印のもとへ申つか」ハされけるハ、法花經の中にハ定まりて、阿弥」陁経を副供養せらるゝなれは、いかなる所に」ても、機嫌さまてあしからさらん所にては、」阿弥陁経につきて、四十八願の様を尺し」のへられ候へきよし、くハしく授られけると」なん、」

聖覚は藤原通憲の孫、澄憲の弟、智弁人に優れる

法然上人の心を知るは聖覚

唯信鈔を作り、広く念仏を勧む

釈文

安居院の法印聖覚は、入道少納言通憲の孫子、法印大僧都澄憲の真弟なり。叡山竹林房の法印静厳を師とす。論説二道を兼ねて、智弁人に優れたりき。しかるに、宿習の至りにやありけむ、深く上人の化導に帰して、浄土往生の口決を受く。大和前司親盛入道、「御往生の後は、疑を誰の人にか決すべき」と、上人に問い奉りけるに、「聖覚法印、我が心を知れり」と宣えり。浄土の法門におきて所存を残されざること、知りぬべし。されば、彼の法印一巻の書を制作して、広く念仏を勧む。世間に流布して『唯信鈔』と号するこれなり。彼の書に云く、「罪深くばいよいよ極楽を願うべし、不簡破戒罪根深と言えり。善少なくば、ますます弥陀を念ずべし。三念五念仏来迎と言えり。空しく身を卑下し、心を怯弱にして、仏智不思議智を疑うことなかれ。例えば、人高き岸の下に有りて、登ることあたわざらんに、力強き人岸の上に有りて、綱を下ろしてこの綱に取り付かせて、我岸の上に引き登らせむと言わんに、引く人の力を疑い、綱の弱からんことを危ぶみて、手を収めてこれを取らずば、更に岸の上に登るべからず。ひとえにその言に従いて、掌を伸べてこれを取らんには、すなわち登ることを得べ

上人、聖覚の念仏功徳の力説を喜ぶ

し。仏力を疑い、願力を憑まざる人は、菩提の岸に登ること難し。ただ、信心の手を伸べて、誓願の綱を取るべし。電光朝露の命、芭蕉泡沫の身、僅かに一世の勤修をもって、たちまちに五趣の古郷を離れんとす。あに緩く諸行を兼ねんや。諸仏菩薩の結縁は、随心供仏の朝を期すべし。大小経典の義理は、百法明門の暮を待つべし」（已上、略抄）とぞ侍るめる。この法印、深く上人の勧化を信敬の間、処々にして説法の度ごとには、弥陀の本願を讃嘆し、念仏の功能を誉め申されけるを、上人聞き給いて、「これひとえに善導の御方便、機感純熟の折節なり。しかるべき名僧、専修念仏の義を信じて、所々にして講釈せば、念仏の弘通何事かこれにしかんや」と悦び仰せられて、法印の許へ申し遣わされけるは、『法華経』の中には定まりて、『阿弥陀経』を副供養せらるるなれば、いかなるところにても、機嫌さまで悪しからざらんところにては、『阿弥陀経』につきて、四十八願の様を釈し述べられ候べき由、詳しく授けられけるとなん。

〔第二段〕　詞書

元久二年八月に、上人瘧病をわつらひ給事」ありけり、月輪殿きこしめしおとろきて、」醫師をめされ、種々の療方をつくさるといへ」とも、治術かなハさりしかハ、

とりわき冥助を」あふかれ、御祈請あらんために、詫摩の法印」證賀におほせて、善導和尚の真影を畠」繪せられ、後京極殿その銘をかゝせ給て、安」居院の法印聖覚于時僧都に、御導師參勤す」へきよし仰らるゝに、法印申けるハ、聖覚も」瘧病の事候か、明日ハおこり日にて候へ」とも、貴命のかれかたきうへ、師範の恩を報」せんために參勤すへく候、たゝし早旦に」御佛事をハしめらるへしとて、翌日拂曉に」小松殿へ參して、辰时より説法をハしめて、」未刻に結願す、その説法の大底ハ、大師尺」尊、なを衆生に同し給ときハ、つねに病悩を」うけ、療治をもちゐたまふ、いはんや凡夫血肉の」身、いかてかその愁なからん、しかれとも、浅智愚鈍」の衆生ハ、このことはりをしらす、さためて疑心を」なさんか、上人の化導すてに佛意にかなふ」ゆへに、まのあたり往生をとくるもの、そのかす」をしらす、しかれハ諸佛、菩薩、諸天、龍神」いかてか衆生の不信をなけかさらん、四天大」王佛法をまほり給ハゝ、かならすわか大師」上人の病悩をいやし給へと、ねんころに」申のへ給けれハ、善導の御影の御前に、旡」香しきりに薫し、上人も聖覚もともに」瘧病おちにけり、聖覚自嘆して、先師」法印ハ炎旱の御祈禱に、大内にして唱導」をつとめ、當座に雨をふらして名譽をほと」こしき、聖覚か身にハ、この事才一の高名」なり、とそ申されける、まことに末代の奇」特、そのころの口遊にてそありける、」

上人、瘧病を患い、九条兼実、治病のため冥助を仰ぐ

善導の肖像をかけて祈請

釈文

元久二年八月に、上人瘧病を患い給うこと有りけり。月輪殿聞し召し驚きて、医師を召され、種々の療方を尽くさるといえども、治術叶わざりしかば、取り分き冥助を仰がれ、御祈請有らんために、託摩の法印証賀に仰せて、善導和尚の真影を図絵せられ、後京極殿その銘を書かせ給いて、安居院の法印聖覚（時に僧都）に、御導師参勤すべき由仰せらるるに、法印申しけるは、「聖覚も瘧病の事候が、明日は瘧日にて候えども、貴命逃れ難きうえ、師範の恩を報ぜんために参勤すべく候。ただし、早旦に御仏事を始めらるべし」とて、翌日払暁に小松殿へ参じて、辰時より説法を始めて、未刻に結願す。その説法の大底は、「大師釈尊、なお衆生に同じ給うときは、常に病悩を受け、療治を用い給う。いわんや凡夫血肉の身、いかでかその愁い無からん。しかれども、浅智愚鈍の衆生は、この理を知らず、定めて疑心をなさんか。上人の化導、すでに仏意に適う故に、眼の当たり往生を遂ぐる者、その数を知らず。しかれば、諸仏・菩薩・諸天・龍神、いかでか衆生の不信を嘆かざらん。四天大王仏法を守り給わば、必ず我が大師上人の病悩を癒し給え」と、懇ろに申し述べ給いければ、善導の

上人、聖覚ともに治る

御影の御前に、異香頻りに薫じ、上人も聖覚もともに瘧病落ちにけり。聖覚自嘆して、「先師法印は炎旱の御祈禱に、大内にして唱導を勤め、当座に雨を降らして、名誉を施しき。聖覚が身には、このこと第一の高名なり」とぞ申されける。誠に末代の奇特、そのころの口遊にてぞ有りける。

〔第三段〕　詞書

法印、ひとへに上人の勸化を信伏して、念佛」往生の口傳相承、そのかくれなく名譽あり」しかハ、承久三年のころ、但馬宮雅成親王念佛」往生に條〻の不審をたてゝ、時の名譽ある」先達に御尋ありけり、この法印その專一」なり、かの請文云、御念佛のあひたの御用心」ハ、一切の功德善根のなかに、念佛最上候、十」惡五逆なりといへとも、罪障またくその障と」ならす、一稱一念のちから決定して、往生せ」しむへきよし、真実堅固に御信受候へき」なり、聊も猶豫の儀、ゆめ〳〵候へからす、或は」身の懈怠不浄にはゝかり、或ハ心の散乱妄念」におそれて、往生極尓に不定のおもひを」なすハ、極たるひか事にて候、佛意にそ」むくへく候なり、日〻の御所作、更に不浄を」憚思食へからす候、念佛の本意ハ、たゝ」常念を要とし候、行住坐臥、時處」諸縁を簡ハす候、但毎月一日欤、殊御精進」潔斎にて御念佛候へき也、その外、

日々の御」所作ハ、たゝ御手水ハかりにて候へき也、已上、取詮」又嘉禄二年のころ、後鳥羽院遠所の」御所より、西林院の僧正承円に仰下されける」御書にも、散心念佛の事、一定出離し」ぬへく候はんやう、明禅、聖覚なとにくハしく」尋さくりて、寂上の至要をしるし申さる」へきよし、仰下されけれハ、法印こまかに」しるし申されけるとなむ、」

聖覚、雅成親王の尋ねに答える一切の善根のうち念仏が最上

釈文

法印、ひとえに上人の勧化を信伏して、念仏往生の口伝相承、その隠れ無く名誉有りしかば、承久三年の頃、但馬宮（雅成親王）念仏往生に条々の不審を立てて、時の名誉有る先達に御尋ね有りけり。この法印その専一なり。彼の請文に云く、「御念仏の間の御用心は、一切の功徳善根の中に、念仏最上に候。十悪五逆なりといえども、罪障全くその障りとならず、一称一念の力、決定して往生せしむべき由、真実堅固に御信受候べきなり。いささかも猶予の儀、ゆめゆめ候べからず。或いは身の懈怠不浄に憚り、或いは心の散乱妄念に怖れて、往生極楽に不定の思いをなすは、極めたる假事にて候、仏意に背くべく候なり。日々の御所作、さらに不浄を憚り思食すべからず候。念仏の本意は、た

常の念仏が最要

散心念仏

だ常念を要とし候。行住坐臥、時処諸縁を簡ばず候。ただし毎月一日か、殊に御精進潔斎にて御念仏候べきなり。そのほか、日々の御所作は、ただ御手水ばかりにて候べきなり」（已上、詮を取る）。また嘉禄二年のころ、後鳥羽院遠所の御所より、西林院の僧正（承円）に仰せ下されける御書にも、散心念仏のこと、一定出離しぬべく候わんよう、明禅・聖覚などに詳しく尋ね探りて、最上の至要を記し申さるべき由、仰せ下されければ、法印細かに記し申されけるとなむ。

〔第四段〕　詞書

上人の才三年の御忌にあたりて、御追善の」ために、建保二年正月に、法印真如堂にして、」七ケ日のあひた道俗をあつめて、融通念」佛をすゝめられけるに、往生の要枢、安心」起行のやう、上人勸化のむね、こま〳〵と」のへたまひて、これもし我大師、法然上人の」仰られぬことを申さは、當寺の本尊御照」罰候へと、誓言再三に及てのち、もしなを不」審あらん人ハ、鎮西の聖光房にたつねと」はるへし、と申されけれハ、聽衆のなかに」一人の隠遁の僧ありけるか、草菴にか」へらすして、すくに筑後國にくたりて聖光房」に謁し、法流をつたへ門才となり、九州弘通」の法將とそ

なりにける、敬蓮社といへるこれ」なり、法印追福の心さしあらはれて、諸人」の随喜はなハたしくそありける、」

聖覚、上人の三回忌に真如堂で融通念仏を行なう

釈文

上人の第三年の御忌に当たりて、御追善のために、建保二年正月に、法印真如堂にして七か日の間、道俗を集めて、融通念仏を勧められけるに、往生の要枢、安心起行の様、上人勧化の旨、細々と述べ給いて、「これ、若し我が大師、法然上人の仰せられぬことを申さば、当寺の本尊御照罰候え」と、誓言再三に及びて後、「もし、なお不審有らん人は、鎮西の聖光房に尋ね問わるべし」と申されければ、聴衆の中に一人の隠遁の僧有りけるが、草庵に帰らずして、すぐに筑後国に下りて、聖光房に謁し、法流を伝え門弟となり、九州弘通の法将とぞなりにける。敬蓮社といえるこれなり。法印追福の志現れて、諸人の随喜甚しくぞ有りける。

不審あらば聖光房に尋ねよ

敬蓮社、聖光房の弟子となる

〔第五段〕　詞書

かの法印、一山の明匠四海の導師として、」公家の勅喚、諸亭の招請ひまなかりしか」

とも、西土往生の心さしふかく、稱名念佛」の行をこたりなくして、つゐに文暦」二年三月五日、生年六十九にて、端坐」合掌し、念佛数百遍をとなへ、往生の」素懐をとけられける、まことにかしこく」たうとくそ侍る、」

聖覚は四海の導師

聖覚、念仏のうちに往生する

釈文

彼の法印、一山の明匠、四海の導師として、公家の勅喚、諸亭の招請暇無かりしかども、西土往生の志深く、称名念仏の行怠り無くして、ついに文暦一年三月五日、生年六十九にて、端坐合掌し、念仏数百遍を唱え、往生の素懐を遂げられける。誠に賢く貴くぞ侍る。

〔第六段〕　詞書

上野國の國苻に、明圓といふ僧侍りき、遊行聖」の念佛申てとをりけるを、とゝめをきて道場をか」まへ、念行を興行しける程に、或夜のゆめに」貴僧きたりて告云、念佛申ものは、かならす極楽」に往生する也、敢て疑事なかれ、末代悪世の衆生」の出離解脱の道、念佛にすきたるハなし、我ハ」吾朝の大導師聖覚といふもの也、法然上人の教に」よりて、弥陀の本願を信し、念佛を行して極楽」に往生したる也、とて一

期の行状、往生の次才、」こまかにかたり給て、いまこの道場の念佛に結」縁せんかために、常にこの道場にあるなり、」但十一月には、本所に法談の事あるによりて、」結縁のために必本所にかへるへし、法談以後ハ又」このところにかへりて、念佛に結縁すへき也、と」の給へり、夢さめて後、不思議の思をなし、聖覚」といへる人ハいつれの所の人そ、吾朝の大導師とハ」何事そ、とたつぬるに、しりたりといふものなかり」けれハ、明圓鎌倉へのほりて、日光の別當僧正」の房にいたりて尋申に、聖覚法印といへるハ、京」都の安居院といふ所に侍りき、天下の大導師」名譽の能説なりしかは、しらぬ人ハなし、と仰」られけれハ、やかて上洛して、安居院の舊跡をた」つね、嫡才憲実法印に夢の次才をかたるに、在世の」行状といひ、往生の次才といひ、一事として違する」事なし、就中十一月一日より、天台大師講を始行」して、廿四日までハ、毎日の講經終日の論談也、しか」るに、十一月にハ本所に法談あり、結縁のために」必本所に歸へきよし示さるゝ事、この講演の砌に」影向の條疑なしとて、憲實法印感涙をそなか」されける、明円ハ、聖覚法印の墳墓にまうてゝ、」夢の中の勸化をよろこひ、歡喜の涙をなかし、」二心なき専修の行者になりにけれハ、本國に」かへりてハ、自行化他のつとめ、念佛の外他事なか」りけり、其後ハ安居院の墓詣となつけて、」毎年に上洛して、かの墳墓にそまうてける、」一期のあひた、念佛をこた

る事なくして、瑞相」をあらハし、端坐合掌して、数百遍の念佛を」となへ、殊勝の往生を遂にけり、子息明心、幼稚」の程は、明圓か後家尼、年ことに安居院の墓」詣をしけるか、明心成人の後ハ、年ことに明心上」洛しけり、明心又兼日に往生の時日をさして、」いすにのほりて念佛数百遍をとなへ、端坐合掌」して往生の素懐を遂にけれハ、其後ハ明心か」子息明觀、毎年上洛して墓詣をそしける、こ」の念仏衆ハ、聖覚の舊跡を念佛の本所と仰崇」しけるによりて、或年明觀上洛の时、憲実法印の」嫡才憲基法印にのそみ申様、この念佛盡未」来際退轉すへからさるよし、僧衆の中に御下知」を下さるへきよし、申けるによりて、弥陁本願の」念仏ハ、濁世末代の出離解脱の要法なるいはれ、」盡未来際退轉すへからさるよし、慇懃に書」下されけれハ、御下知の旨にまかせて、ひとへ」に本願をあふき、念佛退轉あるましきよし、」僧衆ホ請文をさゝけ、念佛いよ〳〵ねんころなり」けれハ、國中の貴賤歸敬の掌をあはせ、結縁」のおもひふかし、天竺、震旦、我朝三國のあひた」に、多の人師念佛の勸化をいたすといへとも、いま」た夢の中の勸化をきかす、この法印の勸」化、まことにめつらしく貴も侍かな、」

上野国明円、夢中に聖覚に会い、教えを受ける

十一月に安居院で法談ありと知る

安居院の旧跡を訪ね、憲実に夢告を語る

釈文

上野国の国府に明円という僧侍りき。遊行聖の念仏申して通りけるを留め置きて、道場を構え、念仏を興行しけるほどに、ある夜の夢に貴僧来りて告げて云く、「念仏申す者は、必ず極楽に往生するなり。敢えて疑うことなかれ。末代悪世の衆生の出離解脱の道、念仏に過ぎたるは無し。我は、吾朝の大導師聖覚というものなり。法然上人の教えによりて、弥陀の本願を信じ、念仏を行じて、極楽に往生したるなり」とて、一期の行状、往生の次第細かに語り給いて、「今この道場の念仏に結縁せんがために、常にこの道場に在るなり。ただし、十一月には本所に法談のこと有るによりて、結縁のために必ず本所に帰るべし。法談以後は、またこのところに帰りて、念仏に結縁すべきなり」と宣えり。夢覚めて後、不思議の思いをなし、「聖覚といえる人はいずれのところの人ぞ。吾朝の大導師とは何事ぞ」と尋ぬるに、「知りたり」と言うもの無かりければ、明円鎌倉へ上りて、日光の別当僧正の房に至りて尋ね申すに、「聖覚法印といえるは、京都の安居院というところに侍りき。天下の大導師、名誉の能説なりしかば、知らぬ人はなし」と仰せられければ、やがて上洛して、安居院の旧跡を訪ね、嫡弟

天台大師講

安居院の墓詣で明円、端座合掌し、念仏のうちに往生

明心往生

明観毎年墓詣で聖覚の旧跡は念仏の本所

憲実法印に夢の次第を語るに、在世の行状といい、往生の次第といい、一事として違することなし。なかんずく十一月一日より、天台大師講を始行して二十四日までは、毎日の講経終日の論談なり。しかるに、十一月には本所に法談有り、結縁のために必ず本所に帰るべき由示さるること、この講演の砌に影向の条疑無しとて、憲実法印感涙をぞ流されける。明円は、聖覚法印の墳墓に詣でて、夢の中の勧化を喜び、歓喜の涙を流し、二心無き専修の行者になりにければ、本国に帰りては、自行化他の勤め、念仏のほか他事無かりけり。その後は安居院の墓詣でと名付けて、毎年に上洛して、彼の墳墓にぞ詣でける。一期の間、念仏怠たること無くして、瑞相を現し、端坐合掌して、数百遍の念仏を唱え、殊勝の往生を遂げにけり。子息明心、幼稚のほどは、明円が後家尼、年毎に安居院の墓詣でをしけるが、明心成人の後は、年毎に明心上洛しけり。明心また兼日に往生の時日を指して、椅子に登りて念仏数百遍を唱え、端坐合掌して往生の素懐を遂げにければ、その後は明心が子息明観、毎年上洛して墓詣でをぞしける。この念仏衆は、聖覚の旧跡を念仏の本所と仰崇しけるによりて、ある年、明観上洛の時、憲実法印の嫡弟憲基法印に望み申す様、この念仏尽未来際退転すべからざる由、僧衆の中に御下知を下さるべき由、申しけ

るによりて、弥陀本願の念仏は、濁世末代の出離解脱の要法なる謂れ、尽未来際退転すべからざる由、慇懃に書き下されければ、御下知の旨に任せて、ひとえに本願を仰ぎ、念仏退転有るまじき由、僧衆等請文を捧げ、念仏いよいよ懇ろなりければ、国中の貴賤帰敬の掌を合わせ、結縁の思い深し。天竺・震旦・我朝三国の間に、多くの人師念仏の勧化をいたすといえども、未だ夢の中の勧化を聞かず。この法印の勧化、誠に珍しく貴くも侍るかな。

夢中の勧化は未だ聞かず

〔奥書〕

十七巻新撰数廿二丁

四十八巻繪傳　知恩院常住

第十八巻

〔第一段〕　詞書

上人製作の選擇集は、月輪殿の仰によりて」えらひ進せらるゝところ也、けたし念仏往生の亀鏡」たり、その簡要少〻しるし侍へし、かの集の第一段云、」道綽禅師、聖道浄土の二門をたてゝ、聖道門をすてゝ、」浄土に歸する文、問云、一切衆生皆仏性あり、遠劫より」このかた、おほくの仏にあふへし、なにゝよりてか、いまにいたる」まて、なをミつから生死に輪廻して、火宅を出さるやと、」荅云、二種の勝法をえて、生死をはらハさるによりて、」こゝをもちて火宅をいてす、なにものをか二とする、一にハ」いはく聖道、二にはいはく浄土なり、その聖道の一」種は、いまの時に證しかたし、一には大聖をさること遙」遠なるによる、二には理ふかくさとり微なるによる、」この故に大集月蔵經云、わか末法の時の中の億〻」の衆生、行をおこし道を修とも、いまた一人として」うるものあらし、當今は、末法これ五濁悪世なり、たゝ」浄土の一門のミありて、通入すへきみちなり、この故に」大經云、もし衆生ありて、たとひ一生悪をつくるとも、」命終の時にのそみて、十念相續してわか名字を

稱」せむに、若むまれすは正覚をとらし、又一切衆生す」へてみつからはからす、もし大乗によらは、真如実相才一」義空、かつていまた心にをかす、もし小乗を論せは、見諦」修道に修入し、乃至那含、羅漢、五下を断し、五上をのそく」こと、道俗をとふ事なく、いまた其分あらす、たとひ人天の」果報あれとも、みな五戒十善のために、よくこの報を」まねく、然にたもちうるものははなハたまれ也、もし」起悪造罪を論せは、なんそ暴風駛雨にことならん、」こゝをもて、諸仏の大慈すゝめて浄土に歸せしめ給ふ、たとひ」一形悪をつくれとも、たゝよく意をかけて、専精につねに」よく念仏すれは、一切の諸障、自然に消除して、さためて」往生する事をう、何そ思量せすして、すへて去心なきや、」私云、浄土宗の學者、まつすへからく此旨をしるへし、たとひ」さきより聖道門を学せる人なりといふとも、浄土門に」おきて、その心さしあらんものは、すへからく聖道をすてゝ、」浄土に歸すへし、例せは、かの曇鸞法師ハ、四論の講説を」すてゝ、一向に浄土に歸し、道綽禅師ハ、涅槃の廣業を」さしをきて、ひとへに西方の行をひろめしかことし、上古の」賢哲なをもちてかくのことし、末代の愚魯むしろ」これにしたかはさらんや、」

同才三段云、弥陁如来餘行をもちて、往生の本願とせす、」たゝ念仏をもちて往生の本願とする文、といひて、無量寿」經上の本願の文以下をひけり、私詞云、問云、あ

まねく諸願に」約して、麁悪をえらひすてゝ、善妙をえらひとる事、その」理しかるへし、なんのゆへそ、才十八の願に、一切の諸行を」えらひすてゝ、たゝひとへに念仏の一行をえらひとりて、」往生の本願とするや、荅云、聖意はかりかたし、たや」すく解するにあたハす、しかりといへとも、いまこゝろミに」この義をもちてこれを解せん、一には勝劣の義、二にハ」難易の義也、初に勝劣といふは、念仏ハこれすくれ、餘行」は劣なり、ゆへいかんとなれは、名号はこれ万徳の歸する」所也、しかれはすなハち、弥陁一仏のあらゆる四智、三身、十力、」四無畏ホの一切の内證の功徳、相好光明説法利生ホの一切」の外用の功徳、みなこと〳〵く阿弥陁仏の名号の中に」攝在せり、かるかゆへに、名号の功徳もともすくれたり」とす、餘行ハしからす、をの〳〵一隅をまもる、こゝをもちて劣と」す、たとへは世間の屋舍のことし、その屋舍の名字の中に、」棟梁、椽柱ホの一切の家具を攝す、棟梁ホの一〻の名字」の中には、一切を攝することあたハす、これをもてしりぬへし、」しかれはすなハち、名号の功徳は、餘の一切の功徳にすくれたり、」かるかゆへに、劣をすてゝ勝をとりて、もちて本願とするか、次に」難易の義といふは、念仏ハ修しやすく、諸行ハ修しかたし、」略抄、かるかゆへにしりぬ、念仏はやすきかゆへに一切に通す、」諸行はかたきかゆへに諸機に通せす、然則、一切衆生をして」平ホに往生せしめむかために、難を

すてゝ易をとりて本」願とするか、若それ造像、起塔をもちて本願とせは、貧」窮困乏のたくひハ、さためて往生のゝそみをたゝん、しかる」を富貴のものはすくなく、貧賤のものはハなはたおほし、」もし智恵高才をもちて本願とせは、愚鈍下智の」ものは定て往生のゝそみをたゝん、しかるに智恵のものハ」すくなく、愚癡のものはなハたおほし、多聞多見を」もちて本願とせは、小聞小見の輩はさためて往生の」望をたゝむ、しかるを多聞のものはすくなく、小聞のもの」はハなはたおほし、もし持戒持律をもちて本願とせは、」破戒無戒の人、さためて往生のゝそみをたゝん、しかるを」持戒のものはすくなく、破戒のものは甚多し、自餘の諸」行これに准してしるへし、まさにしるへし、上の諸行ホを」もちて本願とせは、往生をうるものはすくなく、往生せさる」ものはおほからん、然則、弥陁如來法蔵比丘のむかし、平ホの」慈悲にもよほされて、あまねく一切を攝せんかために、」造像起塔ホの諸行をもちて往生の本願とせす、たゝ」稱名念仏の一行をもちてその本願とする也、乃至、」問曰、一切の菩薩その願をたつといへとも、あるひハすてに」成就せるもあり、又いまた成就せさるもあり、いふかし、」法蔵菩薩の四十八願は、すてに成就せりとやせん、はた」いまた成就せすとやせん、荅曰、法蔵の誓願は、一ゝに成就」し給へり、いかむとなれは、極ホ界の中に、すてに三悪趣」なし、まさにしるへし、これすなハち無三

悪趣の願を成」就し給へるなり、なにをもちてかしることをうるとならは、」すなハち願成就の文、又地獄、餓鬼、畜生、諸難の趣なし」といへるこれなり、又彼國の人天、命をはりてのち、三悪趣ニ」かへることなし、まさにしるへし、これすなハち不更悪趣の」願を成就せるなり、何をもてかしることをうるとならは、」すなハち願成就の文に、又彼菩薩乃至成仏まて悪趣ニ」かへらす、といへるこれなり、又極小の人天、すてに一人として」三十二相を具せさるものあることなし、まさにしるへし、」これすなハち具三十二相の願を成就せるなり、何を」もてかしることをうるとならは、すなハち願成就の文に、彼國に」むまるゝもの、ミなこと〳〵く三十二相を具足すといへる是也、」かくのことく、ハしめ無三悪趣の願より、おはり得三法忍の」願にいたるまて、一ゝの誓願ミなもて成就し給へり、才十八」の念仏往生の願、あにひとりもて成就せさらんや、然則、念仏」の人皆もて往生す、何をもてかしることをうるとならは、すなハち」念仏往生の願成就の文に、もろ〳〵衆生ありて、その名号を」きゝて、信心歓𢡟して、乃至一念至心に廻向して、かの國にむま」れんと願すれは、すなハち往生することを得て、不退轉に」住すといへる是也、おほよそ四十八願をもて、浄土を荘厳せり、」花池寶閣、願力にあらすといふことなし、何そ其中にをいて、」ひとり念仏往生の願を疑惑すへきや、しかのミならす、一ゝの」願のおはりに、

もししからすは正覚をとらしといへり、しかる」に、阿弥陀仏成仏してよりこのかた、いまにをきて十劫なり、」成仏のちかひ、すてにもて成就し給へり、まさにしるへし、」一ゝの願むなしくまうくへからす、故に善導の給ハく、彼仏」いま現に世にましし〳〵て、成仏し給へり、まさにしるへし、本」誓重願むなしからすといふ事、衆生稱念すれは、」かならす往生をう、已上、それすミやかに生死をはなれんと」おもはゝ、二種の勝法の中に、しはらく聖道門をさしをきて、」えらひて浄土門にいれ、浄土門に入らんとおもはゝ、正雑二行の」中に、しはらくもろ〳〵の雑行をなけすてゝ、えらひて正行に」歸すへし、正行を修せんと思はゝ、正助二業の中に、猶助業」をかたハらにして、えらひて正定をもハらにすへし、正定」の業といふは、すなハちこれ仏の御名を稱するなり、名を」稱すれハ、かならすむまるゝことをう、仏の本願によるか」ゆへにと、しつかにおもんみれは、善導の觀經の疏ハ、これ」西方の指南、行者の目足なり、しかれハすなハち西方の」行人、かならすすへからく珎敬すへし、就中に、毎夜の夢」の中に僧ありて、玄義を指授せり、僧といふは、をそらくは」これ弥陀の應現なり、しからはいふへし、この疏ハ弥陀の」傳説なりと、いかにいはんや、大唐相傳していはく、善導ハ」これ弥陀の化身なりと、しからはいふへし、この文ハこれ弥陀」の直説なりと、すてにうつさんとおもはんものは、もハら經法

の」ことくせよ、といへり、このことはまことなるかな、あふきて本地を」たつぬれは、四十八願の法王なり、十劫正覚のとなへ、念」仏にたのミあり、ふして垂迹をとふらへは、専修念仏の導師」なり、三昧正受のことは、往生にうたかひなし、本迹ことなりと」いへとも、化導これ一なり、こゝに貧道むかしこの典を」披閲して、粗素意をさとれり、たちところに余行を」とゝめて、こゝに念仏に歸す、それよりこのかた、今日にいたる」まて、自行化他たゝ念仏をことゝす、然間、まれに津を」とふものにハ、しめすに西方の通津を以てし、たま〳〵行を」たつぬるものには、をしふるに念仏の別行をもてす、これを」信するものはおほく、信せさるものはすくなし、已上略抄、念仏を」事とし、往生をこひねかハん人、あにこの書をいるかせに」すへけんや、」

法然上人、兼実公の仰せにより選択集を撰述する

選択集は念仏往生の亀鏡

第一　聖道浄土二門篇

釈文

上人製作の『選択集』は、月輪殿の仰せによりて選び進ぜらるるところなり。けだし、念仏往生の亀鏡たり。その簡要、少々記し侍るべし。彼の『集』の第一段に云く、「道綽禅師、聖道・浄土の二門を立てて、聖道門を捨てて、浄土に帰する文」、問いて云く、一切衆生皆仏性有り。遠劫よりこの方、多くの

仏に遇うべし。何によりてか、今に至るまで、なお自ら生死に輪廻して、火宅を出ざるやと。答えて云く、二種の勝法を得て、生死を排わざるによりて、ここをもちて火宅を出でず。何ものをか二とする。一には謂く聖道、二には謂く浄土なり。その聖道の一種は、今の時に証し難し。一には、大聖を去ること遙遠なるによる。二には、理深くさとり微なるによる。この故に『大集月蔵経』に云く、「我が末法の時の中の億々の衆生、行を起こし道を修すとも、いまだ一人として得るもの有らじ」。当今は、末法これ五濁悪世なり。ただ浄土の一門のみ有りて、通入すべき道なり。この故に『大経』に云く、「もし衆生有りて、たとい一生悪を作るとも、命終の時に臨みて、十念相続して我が名字を称せむに、もし生まれずば正覚を取らじ」。また一切衆生全て自ら量らず。もし、大乗によらば、真如実相第一義空、かつていまだ心に惜かず。もし、小乗を論ぜば、見諦・修道に修入し、ないし那含・羅漢、五下を断じ、五上を除くこと、道俗を問うこと無く、いまだ其の分有らず。たとい人天の果報有れども、皆五戒十善のために、よくこの報を招く。しかるに、持ち得る者は甚だ希なり。もし、起悪造罪を論ぜば、なんぞ暴風駛雨に異ならん。ここをもて、諸仏の大慈勧めて浄土に帰せしめ給う。たとい一形悪を作れども、ただよく意をかけて、専

精に常によく念仏すれば、一切の諸障、自然に消除して、定めて往生することを得。なんぞ思量せずして、全て去心無きや。私云く、浄土宗の学者、まずすべからくこの旨を知るべし。たとい先より聖道門を学せる人なりというとも、浄土門におきて、その志有らん者は、すべからく聖道を捨てて、浄土に帰すべし。例せば、彼の曇鸞法師は、四論の講説を捨てて、一向に浄土に帰し、道綽禅師は、涅槃の広業を閣きて、ひとえに西方の行を広めしがごとし。上古の賢哲なおもちてかくのごとし。末代の愚魯、寧ろこれに従わざらんや」

同第三段に云く、「弥陀如来余行をもちて、往生の本願とせず。ただ念仏をもちて、往生の本願とする文」と言いて、『無量寿経』上の本願の文以下を引けり。私の詞に云く、「問いて云く、あまねく諸願に約して、麁悪を選び捨てて、善妙を選び取ること、その理しかるべし。なんの故ぞ、第十八の願に、一切の諸行を選び捨てて、ただひとえに念仏の一行を選び取りて、往生の本願とするや。答えて云く、聖意計り難し、輙く解するにあたわず。然りといえども、今試みにこの義をもちてこれを解せん。一には勝劣の義、二には難易の義なり。初めに勝劣というは、念仏はこれ勝れ、余行は劣なり、ゆえ如何となれば、名号はこれ万徳の帰するところなり。しかればすなわち、弥陀一仏のあらゆる四智・

三身・十力・四無畏等の一切の内証の功徳、相好・光明・説法・利生等の一切の外用の功徳、皆ことごとく阿弥陀仏の名号の中に摂在せり。かるがゆえに、名号の功徳、最も勝れたりとす。余行はしからず。各々一隅を守る。茲をもちて劣とす。譬えば世間の屋舎のごとし、その屋舎の名字の中に、棟梁・椽柱等の一切の家具を摂す。棟梁等の一一の名字の中には、一切を摂することあたわず。これをもて知りぬべし。しかればすなわち、名号の功徳は、余の一切の功徳に勝れたり。かるが故に、劣を捨てて勝を取りて、もちて本願とするか。次に、難易の義というは、念仏は修し易く、諸行は修し難し。（略抄）かるが故に知りぬ。念仏は易きが故に一切に通ず。諸行は難きが故に諸機に通ぜず。しかればすなわち、一切衆生をして、平等に往生せしめむがために、難を捨てて易を取りて本願とするか。もしそれ造像・起塔をもちて本願とせば、貧窮困乏の類は、定めて往生の望みを絶たん。しかるを、富貴の者は少なく、貧賤の者は甚だ多し。もし智恵高才をもちて本願とせば、愚鈍下智の者は定めて往生の望みを絶たん。しかるに、智恵の者は少なく、愚痴の者は甚だ多し。多聞多見をもちて本願とせば、少聞少見の輩は、定めて往生の望みを絶たむ。しかるを、多聞の者は少なく、少聞の者は甚だ多し。もし持戒・持律をもちて本願とせば、破戒・無戒

の人、定めて往生の望みを絶たん。しかるを、持戒の者は少なく、破戒の者は甚だ多し。自余の諸行これに准じて知るべし。まさに知るべし。上の諸行等をもちて本願とせば、往生を得る者は少なく、往生せざる者は多からん。しかればすなわち、弥陀如来法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、あまねく一切を摂せんがために、造像・起塔等の諸行をもちて、往生の本願とせず、ただ称名念仏の一行をもちて、その本願とするなり。（乃至）。問いて曰く、「一切の菩薩、その願を建つといえども、あるいはすでに成就せるも有り。またいまだ成就せざるも有り。未審し、法蔵菩薩の四十八願は、すでに成就せりとやせん、はたいまだ成就せずとやせん」。答えて曰く、法蔵の誓願は、一々に成就し給えり。いかんとなれば、極楽界の中に、すでに三悪趣無し。まさに知るべし、これすなわち無三悪趣の願を成就し給えるなり。何をもちてか知ることを得るとならば、すなわち願成就の文、また地獄・餓鬼・畜生、諸難の趣無しと言えるこれなり。また彼の国の人天、命終わりて後、三悪趣に更ること無し。まさに知るべし。これすなわち不更悪趣の願を成就せるなり。何をもちてか知ることを得るとならば、すなわち願成就の文に、また彼の菩薩ないし成仏まで悪趣に更らずと言えるこれなり。また極楽の人天、すでに一人として三十二相を具せざる者有る

こと無し、まさに知るべし、これすなわち具三十二相の願を成就せるなり。何をもてか知ることを得るとならば、則ち願成就の文に、彼の国に生まるる者、皆ことごとく三十二相を具足すと言えるこれなり。かくのごとく、始め無三悪趣の願より、終わり得三法忍の願に至るまで、一々の誓願、皆もって成就し給えり。第十八の念仏往生の願、あに独りもて成就せざらんや。しかればすなわち念仏の人、皆もて往生す。何をもてか知ることを得るとならば、すなわち念仏往生の願成就の文に、諸々衆生有りて、その名号を聞きて、信心歓喜して、乃至一念、至心に廻向して、彼の国に生まれんと願ずれば、すなわち往生することを得て、不退転に住すと言えるこれなり。おおよそ四十八願をもて、浄土を荘厳せり。華池・宝閣、願力に非ずということ無し。なんぞその中において、独り念仏往生の願を疑惑すべきや。しかのみならず一々の願の終わりに、もし然らずば、正覚を取らじといえり。しかるに、阿弥陀仏成仏してよりこの方、今におきて十劫なり。成仏の誓い、すでにもて成就し給えり。まさに知るべし、一々の願空しく設くべからず。故に善導宣わく、「彼の仏今現に世にましまして、成仏し給えり、まさに知るべし、本誓重願空しからずということ、衆生称念すれば、必ず往生を得」（已上）。それ速やかに生死を離れんと思わ

ば、二種の勝法の中に、且く聖道門を閣きて、選びて浄土門に入れ、浄土門に入らんと思わば、正雑二行の中に且く諸々の雑行を投げ棄てて、選びて正行に帰すべし。正行を修せんと思わば、正助二業の中に、なお助業を傍らにして、選びて正定を専らにすべし。正定の業というは、すなわちこれ仏の御名を称するなり。名を称すれば、必ず生まることを得。仏の本願によるが故にと。静かにおもんみれば、善導の観経の疏は、これ西方の指南、行者の目足なり。しかればすなわち、西方の行人、必ずすべからく珍敬すべし。なかんずくに、毎夜の夢の中に僧有りて、玄義を指授せり。僧というは、恐らくはこれ弥陀の応現なり。しからば言うべし、この疏は弥陀の伝説なりと。いかに言わんや、大唐相伝して曰く、「善導はこれ弥陀の化身なり」と。しからば言うべし、「この文はこれ弥陀の直説なり」と。すでに写さんと思わん者は、専ら経法のごとくせよと言えり。このことば真なるかな。仰ぎて本地を尋ぬれば、四十八願の法王なり。十劫正覚の称え、念仏に憑み有り。俯して垂迹を訪えば、専修念仏の導師なり。三昧正受の言葉、往生に疑無し。本迹異なりといえども、化導これ一なり。ここに貧道、昔この典を披閲してほぼ素意を識れり。立ちどころに余行を止めてここに念仏に帰す。それよりこの方、今日に至るまで、自行化他ただ念仏をこ

ととす。しかる間、希に津を問う者には、示すに西方の通津をもってし、たまたま行を尋ぬる者には、誨うるに念仏の別行をもてす。これを信ずる者は多く、信ぜざる者は尠なし」。（已上、略抄）。念仏をこととし往生を希わん人、豈この書を忽にすべけんや。

〔第二段〕　詞書

同製作の往生大要抄に云、至誠心といは、真実の心なり、」その真実といは、身にふるまひ、くちにいひ、心に思ハん事、」みな人めをかさる事なく、まことをあらハすなり、しかるを、」人つねに勇猛強盛の心をゝこすを至誠心と申は、この尺」の心にはたかふなり、」

又云、よはき三心具足したらん人ハ、くらゐこそさからん」すれ、なを往生はうたかふへからさる也、」

又云、外相の善悪をはかへりみす、世間の謗譽をは」わきまへす、内心に穢土をいとひ、浄土をもねかひ、悪をも」とゝめ、善をも修して、まめやかに仏の意にかなはん事を」思を真実とは申也、」

又云、加様に申せは、ひとへにこのよの人めはいかにもあり」なんとて、人のそしり

をもかへりミす、ほかをかさらねハ」とて、心のまゝにふるまふかよき、と申にてはなき也、ハうに」まかせてふるまへは、弦逸とてわろき事にてある也、」時にのそみたる機嫌戒のためはかりに、いさゝか人めをつゝ」むかたは、わさともさこそあるへけれ、」

又云、機嫌戒となつけて、やかて虚假になる事もありぬ」へし、これをかまへてよく〳〵心えわくへし、」

又云、この義を心えわかぬ人にこそあむめれ、仏の本願をは」うたかハねとも、我心のわろけれは往生かなはし、と、申あひたる」か、やかて本願をうたかふにて侍る也、さやうに申たちなは、」いか程まてか、仏の本願にかなふへしとかしり侍へき、それを」わきまへさらんにとりてハ、心のわろさはつきせぬ事にて」こそあらんすれは、いまは往生してんと思たつよハあるまし、」仏の御ちからをはいかほとゝしるそ、これにすきて、仏の願を」うたかふことはいかゝあるへき、」

又云、たゝ心の善悪をもかへりみす、つミの輕重をもわき」まへす、心に往生せんと思て、くちに南無阿弥陁仏とゝなへは、」こゑにつきて決定往生の思をなすへし、その決定心に」よりて、すなハち往生の業はさたまるなり、」

又云、かく心えぬれはやすきなり、往生ハ不定におもへは、」やかて不定になり、定

と思へは、やかて一定する事也、」

又云、深信といは、かの仏の本願は、いかなる罪人をもすてす、」たゝ名号をとなふる一聲までに、決定して往生すと」ふかくたのミて、すこしのうたかひもなきを申也、」

又云、つミをもすて給ハねは、心にまかせてつくらんもくるし」かるまし、一念にも往生すなれは、念仏はおほく申」さすともありなんと、あしく心うる人のいてきて、つミ」をはゆるし、念仏をはせいするやうに申なすか、返ゝ」もあさましく候也、あくをすゝめ、善をとゝむる仏法は、」いかゝあるへき、」

釈文

同じき製作の『往生大要鈔』に云く、「至誠心というは、真実の心なり。その真実というは、身に振舞い、口に言い、心に思わんこと、皆人目を飾ること無く、誠を表わすなり。しかるを、人常に勇猛強盛の心を起こすを至誠心と申すは、この釈の心には違うなり」

また云く、「弱き三心具足したらん人は、位こそ下らんずれ、なお往生は疑うべからざるなり」

また云く、「外相の善悪をば顧みず、世間の謗誉をば弁えず、内心に穢土を厭い、浄土をも願い、悪をも止め、善をも修して、忠実やかに仏の意に適わんことを思うを真実とは申すなり」

また云く、「かように申せば、ひとえにこの世の人目はいかにもありなんとて、人の謗をも顧みず、他を飾らねばとて、心のままに振舞うが良き、と申すにては無きなり。法に任せて振舞えば、放逸とて悪きことにてあるなり。時に臨みたる機嫌戒のためばかりに、いささか人目を包む方は、態ともさこそ有るべけれ」

また云く、「機嫌戒と名付けて、やがて虚仮になることも有りぬべし。これを構えて善く善く心得分くべし」

また云く、「この義を心得分かぬ人にこそあむめれ。仏の本願をば疑わねども、我が心の悪ければ往生叶わじと、申し合いたるが、やがて本願を疑うにて侍るなり。左様に申し立ちなば、いかほどまでか仏の本願に適うべしとか知り侍るべき。それを弁えざらんにとりては、心の悪さは尽きせぬことにてこそ有らんずれば、今は往生してんと思い立つ世は有るまじ。仏の御力をばいかほどと知るぞ。これに過ぎて、仏の願を疑うことは如何あるべき」

また云く、「ただ心の善悪をも顧みず、罪の軽重をも弁えず、心に往生せんと思

いて、口に南無阿弥陀仏と唱えば、声につきて決定往生の思いをなすべし。その決定心によりて、すなわち往生の業は定まるなり」

また云く、「かく心得ぬれば易きなり。往生は不定に思えば、やがて不定になり、定と思えば、やがて一定することなり」

また云く、「深信というは、彼の仏の本願は、いかなる罪人をも捨てず、ただ名号を唱うる一声までに、決定して往生すと深く憑みて、少しの疑も無きを申すなり」

また云く、「罪をも捨て給わねば、心に任せて作らんも苦しかるまじ、一念にも往生すなれば、念仏は多く申さずとも有りなんと、悪しく心得る人の出で来て、罪をば許し、念仏をば制するように申しなすが、返す返すも浅ましく候なり。悪を勧め善を止むる仏法は、いかがあるべき」

〔第三段〕　詞書

上人、大経を尺給とき、四十八願の中の才卅五の女人」往生の願の意をのへての給ハく、上の念仏往生の願」は男女をきらハす、今別にこの願ある、そのこゝろいかん、」つら〳〵この事を案するに、女人はさハりおもし、別して」女人に約せすハ、すなは

ち疑心を生すへし、そのゆへハ、女人は」とかおもし、大梵高臺の閣にもへたてられて、梵衆梵」輔の雲をのそむことなく、帝釋梟懦の床にも」くたされて、三十三天の花をもてあそふ事なし、六天」魔王の位、四種輪王の跡、のそみなかくたえてかけをさゝす、」生死有漏の果報、無常生滅のつたなき身とたにな」らす、いかにいはんや、仏のくらゐをや、諸經論の中に」きらはれ、在ゝ所ゝに擯出せられて、三途八難にあら」すは、赴へきかたなく、六趣四生にあらすは、受へきかた」ちなし、この日本にも、霊地霊験の砌には、ミなこと〳〵く」きらはれたり、比叡山ハ傳教大師の建立、大師みつから」結界して谷をさかひ、峯をかきりて、女人の形をいれ」されは、一乗峯たかくして、五障の雲たなひく事なく、」一味谷ふかくして、三従の水なかるゝ事なし、高野山ハ」弘法大師結界の峯、真言上乗繁昌の地也、三密の月」輪あまねくてらすといえとも、女人非器のやミをはてら」さす、五瓶の智水ひとしくなかるといへとも、女人垢穢の」あかをはすゝかす、　聖武天皇の御願、十六丈金銅の」舎那、はるかにこれを拝見すといへとも、なを扉の内」にはいれられす、　天智天皇の建立、五丈石像の弥勒、」あふきてこれを礼拝すれとも、なを壇の上には障あり、」乃至金峯の雲のうへ、醍醐の霞のそこ、女人更に」かけをさゝす、悲哉両足ありといへとも、のほらさる法の」峯あり、ふまさる仏の庭あり、恥哉、両眼あきらかなりと」いへと

も、見さる霊地あり、拝せさる霊像あり、この穢土の」瓦礫、荊棘の山、泥木素像の仏たにも障あり、いかに」いはんや、衆寶合成の浄土、万徳究竟の仏をや、これに」よりて往生そのうたかひあるへし、かるかゆへに、この理をかゝ」みて別にこの願あり、善導和尚この願を尺しての給ハく、」弥陁の大願力によるかゆへに、女人仏の名号を稱すれは、」命終のとき、女身を轉し男子となる事を得、弥陁御」手をさつけ、菩薩身をたすけて寶花のうへに坐し、」仏にしたかひて往生し、仏の大会にいりて無生を證悟す、」一切の女人、もし弥陁の名願力によらすハ、千劫万劫恒沙ホの」劫にも、つねに女身を轉することを得へからす、といへり、是則」女人の苦をぬき、女人の樂をあたふる、慈悲の誓願」利生なり、已上見于大經尺、取要抄之、」

ある时、尋常なる尼女房とも、吉水の御房へまいりて、」罪ふかき女人も、念仏たにも申せは、極ホへまいり候」なるは、まことにて候やらん、と申けれは、上人大經の尺」の心をねむころに申のへられて、才十八の願のうへに」うたかひをたゝむかために、とりわき女人往生の願を」たて給へる事、まことにたのもし、かたしけなきよしを」仰られけれは、歓喜の涙をなかし、みな念仏門に」いりにけるとなむ、」

上人、尼・女房に女人往生を説く

叡山は女人結界

高野山も女人結界

釈文

上人、『大経』を釈し給う時、四十八願の中の第三十五の女人往生の願の意を述べて宣わく、「上の念仏往生の願は男女を嫌わず。今別にこの願有る、その心いかん。つらつらこの事を案ずるに、女人は障り重し。別して女人に約せずば、すなわち疑心を生ずべし。その故は、女人は科重し。大梵高台の閣にも隔てられて、梵衆梵輔の雲を望むこと無く、帝釈柔儒の床にも下されて、三十三天の花を玩ぶこと無し。六天魔王の位、四種輪王の跡、望み永く絶えて影を差さず。生死の有漏の果報、無常生滅の拙き身とだにならず。いかにいわんや、仏の位をや。諸経論の中に嫌われ、在々所々に擯出せられて、三途八難にあらずば、赴くべき方無く、六趣四生にあらずば、受くべき形無し。この日本にも、霊地霊験の砌には、皆ことごとく嫌われたり。比叡山は伝教大師の建立、大師自ら結界して谷を境い、峰を限りて、女人の形を入れざれば、一乗峰高くして五障の雲棚引くこと無く、一味谷深くして三従の水流るること無し。高野山は弘法大師結跏の峰、真言上乗繁昌の地なり。三密の月輪、あまねく照らすといえども、女人は非器の闇をば照らさず。五瓶の智水等しく流るといえども、女人垢穢の垢

東大寺大仏殿
笠置寺弥勒石仏
金峰山
上醍醐

尼女房ら吉水へ
参りて女人往生
を尋ねる

転女成男

をば漱がず。聖武天皇の御願、十六丈金銅の舎那、遙かにこれを拝見すといえども、猶扉の内には入れられず。天智天皇の建立、五丈石像の弥勒、仰ぎてこれを礼拝すれども、なお壇の上には障り有り。ないし金峰の雲の上、醍醐の霞の底、女人さらに影を差さず。悲しきかな、両足有りといえども、登らざる法の峰有り、踏まざる仏の庭有り。恥ずかしきかな、両眼明らかなりといえども、見ざる霊地有り、拝せざる霊像有り。この穢土の瓦礫・荊棘の山、泥木素像の仏だにも障り有り。いかにいわんや、衆宝合成の浄土、万徳究竟の仏をや。これによりて往生その疑有るべし。かるが故に、此の理を鑑みて別にこの願有り」。善導和尚、この願を釈して宣わく、「弥陀の大願力によるが故に、女人仏の名号を称すれば、命終の時、女身を転じ男子となることを得。弥陀御手を授け、菩薩身を助けて、宝花の上に坐し、仏に従いて往生し、仏の大会に入りて無生を証悟す。一切の女人、もし弥陀の名願力によらずば、千劫、万劫、恒沙等の劫にも、終に女身を転ずることを得べからず」と言えり。これすなわち女人の苦を抜き、女人の楽を与うる、慈悲の誓願利生なり（已上、『大経釈』に見ゆ。要を取りて之を抄す）。ある時、尋常なる尼女房ども、吉水の御房へ参りて、「罪深き女人も、念仏だにも申せば、極楽へ参り候なるは、真にて候やらん」と申しけ

れば、上人『大経』の釈の心を懇ろに申し述べられて、第十八の願の上に疑を絶たんがために、取り分き女人往生の願を立て給えること、真に頼もし、忝き由を仰せられければ、歓喜の涙を流し、皆念仏門に入りにけるとなむ。

〔奥書〕

十八巻析帋数十九丁

四十八巻繪傳　知恩院常住

第十九巻

〔第一段〕　詞書

月輪の禅閤の御歸依あさからさりし」かハ、北政所もおなしく御信伏ありて、念」佛往生の事を御たつねありける御返事」云、かしこまりて申上候、さては御念仏申」させおはしまし候なるこそ、よにうれし」く候へ、まことに往生の行ハ、念仏か目出」事にて候也、そのゆへハ、念佛ハ弥陁の本」願の行なれはなり、余の行ハ、それ真言」止観のたかき行なりといへとも、弥陁の本」願にあらす、又念仏ハ尺迦の付属の行なり、」余行ハ、まことに定散両門の目出たき行」なりといへとも、尺尊これを付属し給ハす、」又念仏ハ六方の諸仏の證誠の行なり、餘の」行ハ、たとひ顕密事理のやむことなき」行なりと申せとも、諸仏これを證誠し給」はす、このゆへに、やう〳〵の行おほく候へとも、」往生のみちには、ひとへに念仏すくれたる」事にて候也、しかるに、往生のみちにうとき」人の申やうハ、餘の真言止観の行にたへ」さるひとの、やすきまゝのつとめにてこそ念」仏ハあれ、と申ハ、きはめたるひかことにて候、その」ゆへハ、弥陁の本願にあらさる余行をきらひ」すて、又尺尊付属にあらさる行

をはゑらひ」とゝめ、又諸仏の證誠にあらさる行をハや」めおさめて、いまはたゝ弥陁の本願にまかせ、尺」尊の付属により、諸仏の證誠にしたかひて、」をろかなるわたしくのはからひをやめて、これ」らのゆへつよき念仏の行をつとめて、往」生をはいのるへし、と申にて候也、されハ恵」心僧都の往生要集に、往生の業念仏を」本とす、と申たる、この心なり、いまはたゝ余」行をとゝめて、一向に念仏にならせ給へし、」念仏にとりても、一向専修の念佛なり、其」むね三昧發得の善導の觀經疏にみえたり、」又雙巻經に、一向専念無量壽仏といへり、」一向の言ハ、二向、三向に對して、ひとへに余」の行をゑらひて、きらひのそく心なり、御」いのりのれうにも、念仏かめてたく候、往生」要集にも、餘行の中に念仏すくれたるよし」みえたり、又傳教大師の七難消滅の法にも、」念仏をつとむへしとみえて候、およそ現世、後」生の御つとめ、なにことかこれにすき候へき」や、いまはたゝ、一向専修の但念佛者にならせ」おはしますへく候、已上略抄、これによりて、専修念」仏の御こゝろさし、ふた心なかりけるとなん、」

法然上人、九条兼実夫人の問に答え、念仏を勧める

釈文

月輪の禅閤の御帰依浅からざりしかば、北政所も同じく御信伏有りて、念仏

念仏は弥陀本願の行

釈迦付属の行

六方諸仏証誠の行

往生の業念仏を本とす（往生要集）

往生のことを御尋ね有りける御返事に云く、「畏まりて申し上げ候。さては、御念仏申させおわしまし候なるこそ、世に嬉しく候え。真に往生の行は、念仏が目出たきことにて候なり。その故は、念仏は弥陀の本願の行なればなり。余の行は、それ真言止観の高き行なりといえども、弥陀の本願に非ず。また念仏は釈迦の付属の行なり。余行は、真に定散両門の目出たき行なりといえども、釈尊これを付属し給わず。また念仏は六方の諸仏の証誠の行なり。余の行は、たとい顕密事理の止事無き行なりと申せども、諸仏これを証誠し給わず。この故に、様々の行多く候えども、往生の道にはひとえに念仏優れたることにて候なり。しかるに、往生の道に疎き人の申す様は、余の真言止観の行に堪えざる人の、易きままの勤めにてこそ念仏はあれ、と申すは、極めたる僻事にて候。その故は、弥陀の本願に非ざる余行を嫌い捨て、また釈尊付属に非ざる行をば選び止め、また諸仏の証誠に非ざる行をば止め収めて、今はただ弥陀の本願に任せ、釈尊の付属により、諸仏の証誠に従いて、愚かなる私の計らいを止めて、これらのゆえ強き念仏の行を勤めて、往生をば祈るべし、と申すにて候なり。されば、恵心僧都の『往生要集』に、往生の業念仏を本とす、と申したる、この心なり。今はただ余行を留めて、一向に念仏にならせ給うべし。念仏にとりても、

一向の言は余の行を選んで嫌い除く心

一向専修の念仏なり。其の旨、三昧発得の善導の『観経疏』に見えたり。又『双巻経』に、一向専念無量寿仏、と言えり。一向の言は、二向・三向に対して、ひとえに余の行を選びて嫌い除く心なり。御祈りの料にも念仏が目出度く候。『往生要集』にも、余行の中に念仏勝れたる由見えたり。また伝教大師の七難消滅の法にも、念仏を勤むべしと見えて候。およそ現世・後生の御勤め、何事かこれに過ぎ候べきや。今はただ一向専修の但念仏者にならせおわしますべく候」（已上、略抄）。これによりて、専修念仏の御志、二心無かりけるとなん。

〔第二段〕　詞書

阿波介といふ陰陽師、上人に給仕して」念仏するありけり、或時上人、かの俗をさし」て、あの阿波介か申念仏と、源空か申念」佛と、いつれかまさると、聖光房にたつね仰」られけるに、心中にわきまふるむねありといへ」とも、御ことはをうけ給はりて、たしかに所存」を治定せんかために、いかてか、さすかに御念」仏にハひとしく候へき、と申されたりけれ」ハ、上人ゆゝしく御気色かはりて、されは、」日来浄土の法門とてハ、なにことをきかれ」けるそ、あの阿波介も仏たすけ給へとお」もひ

て、南無阿弥陀佛と申す、源空も佛」たすけ給へとおもひて、南無阿弥陀仏と」こそ申せ、更に差別なきなり、と仰られけ」れハ、もとより存することなれとも、宗義の肝心」いまさらなるやうに、たうとくおほえて、感涙を」もよをしき、とそかたり給ける、二念珠をし」いたしたるは、この阿波介にてなむ侍なる、」かの阿波介、百八の念珠を二連もちて念仏」しけるに、そのゆへを人たつねけれハ、弟子ひ」まなく上下すれは、その緒つかれやすし、一連」にてハ念仏を申し、一連にてハ数をとりて、つ」もるところの数を弟子にとれハ、緒やすまり」て、つかれさるなり、と申けれは、上人き丶給」て、なに事もわか心にそミぬる事にハ、才」覺かいてくるなり、阿波介きはめて性鈍に、そ」の心をろかなれとも、往生の一大事心にそミ」ぬるゆへに、か丶る事をも案し出けるなり、ま」ことにこれたくミなり、とそほめおほせられける、」

阿波介と上人の念仏に変りなし

釈文

阿波介という陰陽師、上人に給仕して念仏する有りけり。ある時上人、彼の俗を指して、「あの阿波介が申す念仏と、源空が申す念仏と、何れか勝る」と聖光房に尋ね仰せられけるに、心中に弁うる旨有りといえども、御言葉を承

二連の念珠をつくる

りて、確かに所存を治定せんがために、「いかでか、さすがに御念仏には等しく候べき」と申されたりければ、上人由々しく御気色変わりて、「されば、日来浄土の法門とては、何事を聞かれけるぞ。あの阿波介も仏助け給えと思いて、南無阿弥陀仏と申す。源空も仏助け給えと思いて、南無阿弥陀仏とこそ申せ。さらに差別無きなり」と仰せられければ、「元より存ずることなれども、宗義の肝心今更なるように、貴く覚えて、感涙を催しき」とぞ語り給いける。二念珠をしい出したるは、この阿波介にてなん侍るなる。彼の阿波介、百八の念珠を二連持ちて念仏しけるに、その故を人尋ねければ、「弟子暇無く上下すれば、その緒疲れ易し。一連にては念仏を申し、一連にては数を取りて、積もるところの数を弟子に取れば、緒休まりて、疲れざるなり」と申しければ、上人聞き給いて、「何ごとも我が心に染みぬることには、才覚が出で来るなり。阿波介、極めて性鈍に、その心愚かなれども、往生の一大事心に染みぬるゆえに、かかることをも案じ出でけるなり。真にこれ巧みなり」とぞ褒め仰せられける。

〔第三段〕　詞書

上人かたりての給ハく、浄土の法門を学す」る住山者ありき、示云、われすてにこの

教の」大旨を得たり、しかれとも信心いまたおこらす、」いかにしてか信心おこすへき、となけきあはせ」しにつきて、三寶に祈請すへきよし、教訓」をくはへて侍しかは、かの僧はるかに程へて」きたりていはく、御をしへにしたかひて、祈請」をいたし侍しあひた、あるとき、東大寺に詣たり」しに、おりふし棟木をあくる日にて、おひたゝし」き大物の材木とも、いかにしてひきあくへし」ともおほえぬを、轆轤をかまへてこれをあくる」に、大木をめ〳〵と中にまきあけられてとふか」ことし、あなふしきとみる程に、おもふところに」おとしすへにき、これを見て、良匠のはかり」ことなをかくのことし、いかにいはんや、弥陁如来」の善巧方便をやとおもひしおりに、疑網たち」ところにたえて信心決定せり、これしかし」なから、日比祈請のしるしなり、とかたりき、」その〻ち両三年をへてなむ、種〻の霊瑞を」現して往生をとけゝる受教と發心とは各」別なるゆへに、習學するにハ、發心せされとも、境」界の縁を見て信心をおこしけるなり、人なミ」なミに浄土の法をきゝ、念仏の行をたつとも、」信心いまたおこらさらむ人ハ、たゝねむころに」心をかけてつねに思惟し、また三寶にい」のり申へきなり、とそ仰られける、」

住山者、東大寺の上棟を見て信心をおこす

弥陀の善巧方便

釈文

上人語りて宣わく、「浄土の法門を学する住山者在りき。示して云く、「我、すでにこの教えの大旨を得たり。しかれども、信心いまだ起こらず。如何にしてか信心起こすべき」と嘆き合わせしにつきて、三宝に祈請すべき由、教訓を加えて侍りしかば、彼の僧遙かにほど経て来りて云く、「御教に従いて、祈請を致し侍りし間、ある時、東大寺に詣でたりしに、折節、棟木を上ぐる日にて、夥しき大物の材木ども、いかにして引き上ぐべしとも覚えぬを、轆轤を構えてこれを上ぐるに、大木おめおめと中に巻き上げられて飛ぶがごとし。あな不思議と見るほどに、思うところに落とし据えにき。これを見て、良匠の謀猶かくのごとし。いかにいわんや、弥陀如来の善巧方便をやと思いし折に、疑網立ちどころに絶えて信心決定せり。これしかしながら、日頃祈請の験なり」と語りき。その後両三年を経てなん、種々の霊瑞を現して往生を遂げける。受教と発心とは、各別なる故に、習学するには発心せざれども、境界の縁を見て信心を発しけるなり。人並々に浄土の法を聞き、念仏の行を立つとも、信心いまだ起こらざらむ人は、ただ懇ろに心を掛けて常に思惟し、また三宝に祈り申すべきなり」とぞ仰

せられける。

〔第四段〕　詞書

尼聖如房ハ、ふかく上人の化導に歸し、ひ」とへに念仏を修す、所勞の事ありけるか、臨」終ちかつきて、いま一度上人をみたてまつら」はや、と申けれハ、このよしを上人に申に、」おりふし別行の程なりけれは、御文にてこ」まかに仰つかハされけり、かの状云、聖如房の御事」こそ、返〻あさましく候へ、乃至たゝ例ならぬ御」事、大事になとうけ給ハり候ハむたにもいま一」度ハ見まいらせたく、をはりまての御念仏の」事も、おほつかなくこそ思まいらせ候へきに、」まして御心にかけて、つねに御たつね候らむ」こそ、まことにあはれにも心くるしくもおもひ」まいらせ候へ、左右なくうけ給候まゝにまいり」候て、見まいらせたく候へとも、おもひきりて」しはしいてありき候はて、念仏申候はゝやと、」思はしめたる事の候を、やうにこそよる事に」て候へ、これをは退してもまいるへきにて候ニ、又」思候へは、詮してハこの世の見參、とてもかく」ても候なん、かはねを執するまとひにもなり」候ぬへし、たれとてもとまりはつへき身にて」も候はす、我も人も、たゝをくれさきたつか」ハりめはかりにてこそ候へ、そのたえまを思」候も、又いつまてかとさためなきうへに、

たとひ」ひさしと申とも、ゆめまほろしいく程かハ」候へきなれは、たゝかまへて、おなし仏の國に」まいりあひて、蓮のうへにて、この世のいふせさも、」ともに過去の因縁をもかたり、たかひに未来」の化導をもたすけむ事こそ、返ゝも詮にて」候へきと、はしめより申をき候しか、返ゝも本」願をとりつめまいらせて、一念もうたかふ御心なく、」一聲も南無あみたふと申せは、我身ハたとひい」かにつミふかくとも、佛の願力によりて、一定往」生するそとおほしめして、よく〳〵一すちに念」仏の候へき也、我ホか往生は、ゆめ〳〵我身のよ」きあしきにより候まし、ひとへに仏の御力」はかりにて候へき也、我ちからにては、いかにめて」たくたうとき人と申とも、末法のこのころ、」たゝちに浄土にむまるゝほとの事ハ、ありかた」くそ候へき、又仏の御ちからにて候はむにハ、いか」に罪ふかく、をろかにつたなき身なりとも、それニハ」より候まし、たゝ仏の願力を、信し信せぬにそ」より候へき、乃至、さて往生ハせさせおはします」ましきやうにのミ、申きかする人〳〵の候らむ」こそ、返ゝあさましく心くるしく候へ、いかなる」智者、めてたき人、おほせらるとも、それになをと」ろかせおハしまし候そ、をの〳〵のみちにハ、めてた」くたうとき人なりとも、さとりあらす行ことな」る人の申候事ハ、往生浄土のためハ、中〳〵」ゆゝしき退縁、悪知識とも、申候ぬへき事と」もにて候、たゝ凡夫のはからひをは、きゝいれさせ」

おはしまさて、一すちに仏の御ちかひを、たのミまい」らせさせおハしますへく候、さとりことなる人の、」往生をいひさまたけむによりて、一念もうたかふ心あるへからす、といふことはりハ、善導和尚の、」よく〳〵こまかに仰られたる事にて候也、乃至、中〳〵」あらぬすちなる人ハあしく候なん、たゝいかならむ」人にても、尼女房なりとも、つねに御まへに候はむ」人ニ念仏申させて、きかせおハしまして、御心ひとつ」をつよくおほしめして、一向に凡夫の善知識をおほ」しめしすてゝ、仏を善知識にたのミまいらせさせ給」へく候、乃至、かやうに念仏を、かきこもりて申候はむ」なと思候も、ひとへに我身ひとつのためとのミは、」もとより思候はす、おりしも、この御事をかくう」け給候ぬれは、いまよりハ一念ものこさす、こと〳〵く」その往生の御たすけになさんと、廻向しまい」らせ候ハむすれハ、かまへて〳〵おほしめすさまに、とけ」させまいらせ候ハゝやとこそハ、ふかく念しまいらせ候」へ、もしこの心さしまことならは、いかてか御たす」けにもならて候へき、たのミおほしめさるへきにて候、」おほかたハ申いて候しひとことはに、御心をとゝめ」させおはします事も、この世ひとつの事にて」候ハしと、さきの世もゆかしくあはれにこそ、思」しらるゝ事にて候へは、うけ給候ことく、このたひま」ことにさきたゝせおはしますにても、又おもはすに」さきたちまいらせ候事になるさためなさにて候」とも、

つゐに一仏浄土にまいりあひまいらせ候ハむ」事、うたがひなくおほえ候、ゆめまほろしのこの」世にて、いま一度なと思申候事ハ、とてもかく」ても候なん、これをは一すちにおほしめしすてゝ、」いとゝもふかくねがふ御心をもまし、御念仏をも」はけませおハしまして、かしこにてまたむと」おほしめすへく候、乃至、もしむけによはくならせ」おはしましたる御事にて候ハゝ、これハ事なかく」候へく候、えうをとりてつたへまいらせさせおハ」しますへく候、うけ給候まゝに、なにとなくあは」れにおほえて、をしかへし又申候なり已上、略抄、この御文」の趣をふかく心にそめて、念仏をこたらす」して、つゐにめてたき往生をとけにけると」なむ、」

上人、聖如房の臨終に手紙を送る

釈文

尼聖如房は、深く上人の化導に帰し、ひとえに念仏を修す。所労のことありけるが、臨終近付きて、「今一度上人を見奉らばや」と申しければ、この由を上人に申すに、折節別行のほどなりければ、御文にて細かに仰せ遣わされけり。彼の状に云く、「聖如房の御事こそ、返す返す浅ましく候え。（乃至）ただ例ならぬ御事、大事になど承り候わんだにも、今一度は見参らせたく、終わりまでの御念仏のことも、覚束無くこそ思い参らせ候べきに、まして御心に掛けて、

この世での見参は骸に執する惑いともなる

夢幻のこの世で、いま一度の出会いは詮ないこと

仏の願力を信じて一筋に念仏せよ

常に御尋ね候らんこそ、真に哀れにも心苦しくも思い参らせ候え。左右無く承り候ままに参り候いて、見参らせたく候えども、思い切りて暫し出で歩き候わで、念仏申し候わばやと、思い始めたることの候を、様にこそよることにて候え、これをば退しても参るべきにて候に、また思い候えば、詮じてはこの世の見参、とてもかくても候いなん、屍を執する惑いにもなり候いぬべし。誰とても止まり果つべき身にても候わず。我も人も、ただ後れ先立つ代わり目ばかりにてこそ候え。その絶え間を思い候も、また何時までかと定め無き上に、たとい久しと申すとも、夢幻いくほどかは候べきなれば、ただ構えて、同じ仏の国に参り会いて、蓮の上にて、この世の鬱悒さも、ともに過去の因縁をも語り、互いに未来の化導をも助けんことこそ、返す返すも詮にて候べきと、始めより申し置き候いしが、返す返すも本願を取り詰め参らせて、一念も疑う御心無く、一声も南無阿弥陀仏と申せば、我が身は、たといいかに罪深くとも、仏の願力によりて、一定往生するぞと思し召して、能く能く一筋に念仏の候べきなり。我等が往生は、ゆめゆめ我が身の良き悪しきにより候まじ、ひとえに仏の御力ばかりにて候べきなり。我が力にては、いかに目出度く貴き人と申すとも、末法のこの頃直ちに浄土に生まるるほどのことは、有難くぞ候べき。また仏の御

行の異なる人が申すことは往生のためには退縁となる。凡夫の計らいを聞き入れず、一筋に弥陀の誓願を憑むように

心を強く持ち、仏を善知識とされよ

力にて候わんには、いかに罪深く、愚かに拙き身なりとも、それにはより候まじ。ただ仏の願力を、信じ信ぜぬにぞより候べき。（乃至）さて、往生はせさせおわしますまじき様にのみ、申し聞かする人々の候らむこそ、返す返す浅ましく心苦しく候え。いかなる智者、目出度き人、仰せらるとも、それにな驚かせおわしまし候ぞ。おのおのの道には目出度く貴き人なりとも、悟り有らず行異なる人の申し候ことは、往生浄土のためは、中々由々しき退縁・悪知識とも、申し候いぬべき事どもにて候。ただ凡夫の計らいをば、聞き入れさせおわしまさで、一筋に仏の御誓を憑み参らせさせおわしますべく候。解り異なる人の往生を言い妨げんによりて、一念も疑う心有るべからず、という理は、善導和尚のよくよく細かに仰せられたることにて候なり。（乃至）中々あらぬ筋なる人は悪しく候いなん。ただ如何ならむ人にても、尼女房なりとも、常に御前に候わむ人に念仏申させて、聞かせおわしまして、御心一つを強く思し召して、一向に凡夫の善知識を思し召し捨てて、仏を善知識に憑み参らせさせ給うべく候。（乃至）かように念仏を、掻き籠りて申し候わむなど思い候も、ひとえに我が身一つのためとのみは、元より思い候わず。折しも、この御事をかく承り候いぬれば、今よりは一念も残さず、ことごとくその往生の御助けになさんと、廻向し

参らせ候わむずれば、構えて構えて思し召す様に、遂げさせ参らせ候わばやとこそは、深く念じ参らせ候え。もし、この志　誠ならば、いかでか御助けにもならで候べき。馮み思し召さるべきにて候。大方は申し出で候いし一言葉に、御心を留めさせおわしますことも、この世一つのことにて候わじと、先の世もゆかしく哀れにこそ、思い知らるることにて候えば、承り候ごとく、この度誠に先立たせおわしますにても、また思わずに先立ち参らせ候ごとになる定め無さにて候とも、ついに一仏浄土に参り会い参らせ候わむこと、疑無く覚え候。夢幻のこの世にて、今一度など思い申し候ことは、とてもかくても候いなん。これをば一筋に思し召し捨てて、いとども深く願う御心をも増し、御念仏をも励ませおわしまして、かしこにて待たんと思し召すべく候。（乃至）もし、無下に弱くならせおわしましたる御事にて候わば、これはこと長く候べく候。要を取りて、伝え参らせさせおわしますべく候。承り候ままに、何となく哀れに覚えて、押し返しまた申し候なり」（已上、略抄）。この御文の趣を深く心に染めて、念仏怠らずして、ついに目出度き往生を遂げにけるとなむ。

一仏浄土で会えることは疑い無し。

聖如房往生

〔第五段〕　詞書

仁和寺にすみける尼、上人にまいりて」申やう、ミつから千部の法華經をよむ」へきよし、宿願の事ありて、七百部は」すてによみをハれり、しかるにとしすて」にたけ侍ぬ、のこりの功いかにしてをへ」侍へしともおほえ侍らす、となけき申」けれハ、としよりたまへる御身にハ、めて」たく七百？までハよみ給へるものかな、のこ」りをは、一向念仏になされ候へしとて、念仏の」功能をとき、かせられけれハ、其のちは」法華經の讀誦をとゝめて、一向専稱して」とし月をへて、すてに往生をとけにけり、」丹後國志樂の庄に、弥勒寺といふ山寺の」一和尚なりける僧の、むかしハ天台山の学徒、」のちにハ遁世して、上人の弟子となりて、」一向に念佛して、五條の坊門冨少路に」すみけるか、ひるねしける夢に、そらに」紫雲そひけり、なかに一人の尼あり、まこと」に心よけにうちゑミて、われハ法然上人の」をしへによりて念仏して、只今すてに」極楽へ往生し候ぬるそ、これハ仁和寺に」候つる尼なり、と申とみて夢さめぬ、やか」て上人のおはしましける九条なる所へ参」て、妄想にてや候らん、かゝるゆめを見て候と」申けれハ、上人うち案したまひて、さる」人あるらむとて、やかて仁和寺へ使をつか」はされんとするに、日くれにけれハ、次の」あしたつかは

さる、便宜のよしにて、なに」事か候、とたつぬへし、とおほせられけれハ、」つかひかのところへむかひてたつね申」に、かの尼公ハ、昨日午刻にはや往生し」候ぬ、とそ荅申ける、あはれにたうと」き事にてそありける、」

仁和寺の尼、法華経の千部読誦を発願し、うち三百部は念仏にかえ、往生す

釈文

仁和寺に住みける尼、上人に参りて申す様、「自ら千部の『法華経』を読むべき由、宿願のこと有りて、七百部はすでに読み終われり。しかるに年すでに長け侍りぬ。残りの功、いかにして終え侍るべしとも覚え侍らず」と嘆き申しければ、「年寄り給える御身には、目出たく七百部までは読み給えるものかな。残りをば、一向念仏になされ候べし」とて、念仏の功能を説き聞かせられければ、その後は『法華経』の読誦を止めて、一向専称して年月を経て、すでに往生を遂げにけり。丹後国志楽の庄に、弥勒寺という山寺の一和尚なりける僧の、昔は天台山の学徒、後には遁世して、上人の弟子となりて、一向に念仏して、五条の坊門富小路に住みけるが、昼寝しける夢に、空に紫雲聳けり、中に一人の尼在り。真に快げにうち笑みて、「我は、法然上人の教えによりて念仏して、ただ今すでに極楽へ往生し候いぬるぞ。これは仁和寺に候いつる尼なり」と申すと見

て夢覚めぬ。やがて上人のおわしましける九条なる所へ参りて、「妄想にてや候らん。かかる夢を見て候」と申しければ、上人うち案じ給いて、「さる人有るらむ」とて、やがて仁和寺へ使いを遣わされんとするに、日暮れにければ、次の朝遣わさる。「便宜の由にて何事か候と尋ぬべし」と仰せられければ、使い彼の所へ向かいて尋ね申すに、「彼の尼公は、昨日午刻に早や往生し候いぬ」とぞ答え申しける。哀れに貴きことにてぞありける。

〔奥書〕

十九巻析繖数廿二丁

四十八巻繪傳　知恩院常住

第二十巻

〔第一段〕　詞書

河内國に天野の四郎とて、強盗の張本」なるものありけり、人をころし、財をかすむる」を業として、世をわたりけるか、としたけて後、」上人の化導に歸し、出家して教阿弥陁仏」と号しけり、つねに上人の御もとに參して、」教訓をかふりけるか、或時、夜半ハかりに上人」おきゐたまひて、ひそかに念仏し給かとおほ」しき事ありけり、教阿弥陁仏うちしハふき」たりけれは、上人やかてふし給ぬ、ねいり給」へるさまにて、その夜もあけにけり、教阿弥陁」仏、心のうちにいと心えぬわさかなとおもひけれ」とも、たつね申にをよはてやミにけり、程へて」のち、又參たるに、上人ハ持仏堂にをハしませ」ハ、教阿弥陁佛ハおほゆかに候して申けるは、」無縁のものにて、在京かなひかたく侍れハ、相摸」國河村と申ところに、あひしりたるものゝ侍を、」たのミてまかりくたり侍り、としたけ侍ぬれは、」又見參に入らむこともかたく候、もとより無智の」者にて侍れは、甚深の法門をうけ給候とても、」その甲斐あるへしとも覚侍らす、たゝ詮を」とりて、決定往生仕ぬへき御一言をうけ給」ハりて、

生涯の御かたみにそなへ侍らむと、上人」の給はく、まつ念仏にハ、甚深の義といふことなし、」念仏申ものは、かならす往生すとしるハかり也、」いかなる智者、学生なりとも、宗にあかさゝらむ」義をは、いかてかつくりいたしていふへき、ゆめ〳〵」甚深の義あるらむと、ゆかしく思はるへからす、」念仏ハやすき行なれは、申人ハおほけれ」とも、往生するものゝすくなきハ決定往生の故」實をしらぬゆへなり、去月に、又人もなくて、」御房と源空とたゝ二人ありしニ、夜半はか」りにしのひやかに起居て念佛せしをは、」御房ハきかれけるか、と仰らるれは、寝耳にさや」らむと承候き、と申けれハ、それこそ、やかて」決定往生の念仏よ、虚假とて、かさる心にて申」念佛か往生ハせぬなり、決定往生せんとおも」ハゝ、かさる心なくして、まことの心にて申へし、」いふにかひなきおさなきもの、もしハ蓄生なとに」むかひてハ、かさる心ハなけれとも、朋同行は」いふにをよはす、その外つねになれみる妻子眷」属なれとも、東西を弁ほとの者になりぬれハ、」それかために、かならすかさる心ハおこるなり、人の」なかにすまむにハ、その心なき凡夫ハあるへからす、」すへて親しきも疎も、貴も賤も、人にすき」たる往生のあたハなし、それかためにかさる心を」おこして、順次の往生をとけされハなり、さり」とて獨居もかなはす、いかゝして人目をかさる心」なくして、まことの心にて念佛すへきといふに、」つねに人にま

しりて、しつまる心もなく、かさる」心もあらむものは、夜さしふけて、見人もなく、」聞人もなからむ時、しのひやかに起居て、百反にても」千反にても、多少こゝろにまかせて申さむ念」仏のミそ、かさる心もなけれハ、仏意に相應して、」決定往生ハとくへき、この心を得なハ、かならすしも」夜にハかきるへからす、朝にても、晝にても、暮にても、」人のきくは、かりなからむ所にて、つねにハかくの」ことく申へし、所詮、決定往生をねかふ、まことの」念仏申さむするかさらぬ心ねは、たとへハ盗人」ありて、人の財を思かけて、ぬすまむとおもふ」心ハ底にふかけれとも、面ハさりけなき様にもて」なして、かまへてあやしけなる色を、人にみえ」しとおもはむかことし、そのぬすみ心ハ、人またく」しらねハ、すこしもかさらぬ心なり、決定往生せむ」する心も又かくのことし、人おほくあつまり居」たらむなかにても、念仏申いろを人にみせすし」て、心にわするましきなり、その时の念仏ハ、佛より」ほかハたれかこれをしるへき、仏しらせ給ハゝ、往生」なむそ疑ハむ、と仰られけれは、教阿弥陁仏申」さく、決定往生の法門こそ、心得候ぬれ、すてにさ」とりきはめ侍り、この仰をうけ給さらましかハ、」このたひの往生ハあふなく候ハまし、但この仰」のことくにてハ、人のまへにて念珠をくり、口をは」たらかす事はあるましく候やらむと、上人の給」ハく、それ又僻韻なり、念佛の本意ハ、常念を」詮とす、されは、念

〻相續せよとこそすゝめられ」たれ、たとへは世間の人をみるに、おなし人なれ」とも、豪憶あひわかれて、憶病の者になりぬれハ、」身のためくるしかるましき、聊のいかりをもをち」おそれて逃かくる、豪の者になりぬれハ、命を」うしなふへきこはき敵の、しかも逃かくれなハ、」たすかるへきなれとも、すこしもおそれす、ひと」しさりもせさるかことし、これかやうに真偽の二類」あり、地躰いつはり性にして、かさる心あるものは、身」のために要なき聊の事をも、かならすいつはり」かさるなり、もとよりまことの心ありて、虚言せぬもの」ハ、聊の矯飾してハ、身のため、おほきにその益ある」へき事なれとも、身の利益をはかへりミす、底」にまことありてすこしもかさる心なし、これミな」本性にうけて、むまれたるところなり、そのまこ」との心のものゝ、往生せんとおもひて念仏に帰し」たらんハ、いかなる所、いかなる人のまへにて申すとも、」すこしもかさる心あるましけれハ、これ真実心の」念仏にして、決定往生すへきなり、なんそこれを」いましめむ、又地躰ハ、いつはり性にして、世間さまに」つけてハ、いさゝか不實の事もありしかとも、」知識にあひて發心して、往生せんとおもふ心ふかく」なりぬれは、念〻相續せんとおもひて、いかなる所、いか」なる人のまへにても、無想にひた申に申さむもの、」これ又真實心の念仏なれハ、決定往生すへきなり、」またく制の限にあらす、いまいふところハ、三

心のなか」に一心もかけぬれハ、往生せすと尺給へるに、三心」のなかの真實心、人ことに發かたけれは、その真」實心を發へきやうをいふはかりなり、されハとて、」たゝのとき念仏な申そとは、いかゝすゝむへきと、又」教阿弥陀仏申さく、さきに仰の侍つるやうに、夜」念佛申さむにハ、かならす起居候へきか、又念珠」袈裟をとり侍へきかと、上人の給ハく、念仏の」行ハ、行住坐臥をきらはぬ事なれハ、ふして」申さむとも、居て申さむとも、心にまかせ、时による」へし、念珠をとり、袈裟をかくる事も、又折二」より躰にしたかふへし、たゝ詮するところ、威」儀ハいかにもあれ、このたひかまへて往生せんと」おもひて、まことしく念仏申さむのミそ大切」なる、と仰られけれハ、教阿弥陀仏歓乞躍踊」し、合掌礼拜して、罷出にけり、翌日に法蓮」房信空のもとへゆきて暇こひけるに、昨日上人」の授給へる決定往○生の義とて申いたして、このたひ」の往生ハ、すこしも疑なきよしよろこひ申て、」東國へ下向しにけり、其後上人の御まへにて、」法蓮房この事を申いたして、さることの侍ける」にや、と申されけれハ、その事なり、さる舊盗」人と聞置て侍しほとに、對機説法して侍き、一」定心得たりけにこそみえしか、とそ仰られける、」教阿、かの河村にくたりてすミ侍けるか、所勞」つきて、終焉にのそむに、同行にかたりていはく、」わか往生ハ決定なり、これすなはちふかく上人」のをしへを信するゆへなり、往生のや

うかならす」上人に参して申へし、と遺言して、正念たか」はす、合掌みたるゝ事なく、高聲念佛」数十反となへてをハりにけり、同行やかて」上洛して、遺言の次才くハしく上人に申」けれは、よく心えたりとみえしか、相逺せさり」ける、あはれなる事なり、とそ仰られける、」

強盗天野四郎、専修念仏により往生する

教阿弥陀仏

下向に当り教化を乞う

釈文

河内国に天野の四郎とて、強盗の張本なるもの在りけり。人を殺し財を掠むるを業として、世を渡りけるが、年長けて後、上人の化導に帰し、出家して教阿弥陀仏と号しけり。常に上人の御許に参じて教訓を被りけるが、ある時、夜半ばかりに上人起き居給いて、密かに念仏し給うかと思しきことありけり。教阿弥陀仏、うち咳きたりければ、上人やがて臥し給いぬ。寝入り給えるさまにて、その夜も明けにけり。教阿弥陀仏、心の内にいと心得ぬ業かなと思いけれども、尋ね申すに及ばで止みにけり。ほど経て後、また参りたるに、上人は持仏堂におわしませば、教阿弥陀仏は大床に候じて申しけるは、「無縁の者にて、在京叶い難く侍れば、相摸国河村と申す所に、相知りたる者の侍るを憑みて罷り下り侍り。年長け侍りぬれば、また見参に入らんことも難く候。元より無智

念仏には甚深の義なし

飾る心なく真の心にて申すべし

の者にて侍れば、甚深の法門を承り候とても、その甲斐有るべしとも覚え侍らず。ただ詮を取りて決定往生仕ぬべき御一言を承りて、生涯の御形見に供え侍らむ」と。上人宣わく、「まず念仏には、甚深の義ということ無し。念仏申す者は、必ず往生すと知るばかりなり。いかなる智者・学生なりとも、宗に明かざらむ義をば、いかでか作り出して言うべき。ゆめゆめ甚深の義有るらむと、ゆかしく思わるべからず。念仏は易き行なれば、申す人は多けれども、往生する者の少なきは、決定往生の故実を知らぬ故なり。去んぬる月に、また人も無くて、御房と源空とただ二人在りしに、夜半ばかりに忍びやかに起き居て念仏せしをば、御房は聞かれけるか」と仰せらるれば、「寝耳にさやらんと承り候いき」と申しければ、「それこそ、やがて決定往生の念仏よ。虚仮とて、飾る心にて申す念仏が往生はせぬなり。決定往生せんと思わば、飾る心無くして、真の心にて申すべし。言うに甲斐無き幼き者、もしは畜生などに対いては、飾る心は無けれども、朋同行は言うに及ばず、そのほか常に馴れ見る妻子眷属なれども、東西を弁うるほどの者になりぬれば、それがために、必ず飾る心は起こるなり。人の中に住まむには、その心無き凡夫は在るべからず。すべて親しきも疎きも、貴きも賤しきも、人に過ぎたる往生の仇は無し。それがために飾る心を起こして、順

念仏申す色を人に見せずして念仏申せ、

次の往生を逐げざればなり。さりとて、独居も叶わず。いかがして人目を飾る心無くして、真の心にて念仏すべきというに、常に人に混じりて、静まる心も無く、飾る心も有らん者は、夜差し更けて、見る人も無く、聞く人も無からむ時、忍びやかに起き居て、百反にても千反にても、多少心に任せて申さむ念仏のみぞ、飾る心も無ければ、仏意に相応して決定往生は逐ぐべき。この心を得なば、必ずしも夜には限るべからず。朝にても、昼にても、暮れにても、人の聞く憚り無からむところにて、常にはかくのごとく申すべし。所詮、決定往生を願う、真の念仏申さんずる飾らぬ心根は、例えば盗人在りて、人の財を思い掛けて、盗まむと思う心は底に深けれども、面はさりげ無きようにもてなして、構えて怪しげなる色を、人に見えじと思わむがごとし。その盗み心は、人全く知らねば、少しも飾らぬ心なり。決定往生せむずる心もまたかくのごとし。人多く集まり居たらむ中にても、念仏申す色を人に見せずして、心に忘るまじきなり。その時の念仏は、仏より外は誰かこれを知るべき。仏知らせ給わば、往生何ぞ疑わむ」と仰せられければ、教阿弥陀仏申さく、「決定往生の法門こそ、心得候いぬれ。すでに悟り窮め侍り。この仰せを承らざらましかば、この度の往生は危なく候わまし。ただし、この仰せのごとくにては、人の前にて念珠を繰り、口を

念仏の本意は常念を詮とす

働かすことは、有るまじく候やらむ」と。上人宣わく、「それまた僻韻なり。念仏の本意は、常念を詮とす。されば、念々相続せよとこそ勧められたれ。例えば、世間の人を見るに、同じ人なれども、豪臆相別れて、臆病の者に成りぬれば、身のため苦しかるまじき、いささかの怒りをも怖じ恐れて逃げ隠る。豪の者に成りぬれば、命を失うべき強き敵の、しかも逃げ隠れなば、助かるべきなれども、少しも恐れず、一退りもせざるがごとし。これが様に真偽の二類有り。地体偽り性にして、飾る心有る者は、身のために要無き聊かのことをも、必ず偽り飾るなり。元より真の心有りて虚言せぬ者は、聊かの矯飾しては、身のため、大きにその益有るべきことなれども、身の利益をば顧みず、底に真有りて少しも飾る心無し。これ皆、本性に受けて生まれたるところなり。その真の心の者の往生せんと思いて念仏に帰したらんは、いかなるところ、いかなる人の前にて申すとも、少しも飾る心有るまじければ、これ真実心の念仏にして、決定往生すべきなり。何ぞこれを戒めむ。また地体は偽り性にして、世間ざまにつけては、聊か不実のことも有りしかども、知識に会いて発心して、往生せんと思う心深くなりぬれば、念々相続せんと思いて、いかなるところ、いかなる人の前にても、無想に直申しに申さむ者、これまた真実心の念仏なれば決定往生すべきなり。

三心のなかの真実心

全く制の限りに非ず。今言うところは、三心の中に一心も欠けぬれば、往生せずと釈し給えるに、三心の中の真実心、人ごとに発し難ければ、その真実心を発すべき様を言うばかりなり。さればとて、ただの時念仏な申しそとは、いかが勧むべき」と。また教阿弥陀仏申さく、「先に仰せの侍りつるように、夜念仏申さむには、必ず起き居候べきか、また念珠袈裟を取り侍るべきか」と。上人宣わく、

念仏の行は行住坐臥を嫌わず

「念仏の行は、行住坐臥を嫌わぬことなれば、臥して申さむとも、居て申さむとも、心に任せ、時によるべし。念珠を取り、袈裟を掛くることも、また折により体に従うべし。ただ詮ずるところ、威儀はいかにも有れ、この度構えて往生せんと思いて、誠しく念仏申さむのみぞ大切なる」と仰せられければ、教阿弥陀仏、歓喜踊躍し、合掌礼拝して、罷り出でにけり。翌日に法蓮房信空の許へ行きて暇請いけるに、昨日上人の授け給える決定往生の義とて申し出して、この度の往生は、少しも疑無き由喜び申して、東国へ下向しにけり。その後、上人の御前にて、法蓮房このことを申し出して、「さることの侍りけるにや」と申されければ、「そのことなり。さる旧盗人と聞き置きて侍りしほどに、対機説法して侍りき。一定心得たりげにこそ見えしか」とぞ仰せられける。教阿、彼の河村に下りて住み侍りけるが、所労尽きて、終焉に臨むに、同行に語りて云

信空に暇請いして東国に下向

同行、往生のさまを法然上人に告げる

く、「我が往生は決定なり。これすなわち、深く上人の教えを信ずる故なり。往生の様必ず上人に参じて申すべし」と遺言して、正念違わず、合掌乱るること無く、高声念仏数十遍唱えて終わりにけり。同行やがて上洛して、遺言の次第詳しく上人に申しければ、「能く心得たりと見えしが、相違せざりける、哀れなることなり」とぞ仰せられける。

〔第二段〕　詞書

沙弥随蓮住四条万里小路ハ、上人配所へおもむき給し」時、御とも申て帰依あさからさりき、上人これを」あはれミて、念仏往生の道を開示し給に、」ふかく信受してふた心なく念仏しけり、上人」往生の後、建保二年のころ、いかに念仏すとも、」学問して三心をしらさらむにハ、往生すへから」すと申ものありけれハ、随蓮申さく、故上人ハ、」念仏ハ様なきをやうとす、たゝひらに仏語を信」して念仏すれは、往生するなりとて、またく」三心のことをも仰られさりきと、かの人かさねて」いはく、一切に心うましきものゝために、方便」して仰られけるなり、上人御素意のおもむ」きハとて、経尺の文なとゆゝしけに申きかせ」けれは、まことにさもやあるらむと、いさゝか疑」心ををこすことありけるに、ある夜のゆめに、法」勝寺の西門より入て見れハ、池のな

かにいろ〳〵の」蓮花さきみたれたり、西の廊のかたへあゆミより」て見れハ、僧衆あまた烈座して、浄土の法門を」談す、随蓮、きさハしにのほりあかりてみれは、」上人北座に南むきに坐したまへり、随蓮見」たてまつりてかしこまるに、上人見たまひて、」これへまいれとめしけれハ、まちかくまいりぬ、随」蓮いまたことはをいたさゝるに、上人の給ハく、汝か」このほと心になけきおもふこと、ゆめ〳〵わつらふ」へからすと、随蓮、この事すへて人にも申さす、」なにとしてしろしめしたるにかとおもひなから、上」件のやうをくハしく申に、上人仰られていはく、」たとへは、ひか事をいふものありて、あの池の蓮花」を蓮花にハあらす、梅そ桜そといはゝ、信すへしや」と、随蓮申て云、現に蓮花にて候はむをは、」いかに人申候とも、いかてか信し候へきと、上人」の給ハく、念仏の義も又かくのことし、源空か」汝に、念仏して往生する事ハ、決定して」疑なし、とをしへしを信たるは、蓮花を蓮」花とおもはむかことし、ふかく信してとかくの」沙汰に及はす、たゝ念仏を申へきなり、」あらぬ邪見の桜梅の義をは、ゆめ〳〵信す」へからす、と仰らるとみてゆめさめぬ、随蓮、疑」念のこりなく散にけり、念仏功つもり、臨終正」念にして、往生の素懐をとけゝるとなむ、」抑、上人あるところにハ三心のやうをくハしく」をしへ、ある所ニハ三心の沙汰詮なきよし」仰られたり、これ人によるへき事なり、名号」をとなふれ

は、かならす往生すとはかり、まめや」かにたのみてとなふれハ、その人の心にをの」つから三心もそなハりぬるを、中〳〵に三心とて」事〳〵しく申なすほとに、かへりて信心をみた」ることも侍なり、かゝらむ人のためにハ、三心の」沙汰無益の事なるへし、もし日来ハうた」かひの心もあり、三心具せぬ人も、聖教を学」すれは、道理にをれて三心のおこる事もあ」れハ、さやうならむ人のためにハ、三心の様」をしらむも大切なるへきを、一向に」これを非せは、又そのとかあるへし、この」すちを心えなは、上人両様の御勧進」さらに相逐を成すへからさるものなり、」

沙弥随蓮、上人流罪のとき供をする

念仏は様なきを様とす。ひらに仏語を信じて念仏せば往生す

釈文

沙弥随蓮（四条万里小路に住す）は、上人配所へ赴き給いしとき、御供申して帰依浅からざりき。上人これを哀れみて、念仏往生の道を開示し給うに、深く信受して二心無く念仏しけり。上人往生の後、建保二年の頃、「いかに念仏すとも、学問して三心を知らざらむには、往生すべからず」と申す者有りければ、随蓮申さく、「故上人は、念仏は様無きを様とす。ただ平に仏語を信じて念仏すれば、往生するなりとて、全く三心のことをも仰せられざりき」と。彼の人重ねて云く、「一切に心得まじき者のために、方便して仰せられけるなり。上人御

随蓮、三心に疑心を起し夢の中で上人の教えをうける

蓮華は蓮華にして桜梅にあらず

疑念散りて、随蓮臨終正念に往生す

素意の趣は」とて、経釈の文など由々しげに申し聞かせければ、「真にさもや有るらむ」と、聊か疑心を起こすこと有りけるに、ある夜の夢に、法勝寺の西門より入りて見れば、池の中に色々の蓮華咲き乱れたり。西の廊の方へ歩み寄りて見れば、僧衆あまた列座して、浄土の法門を談ず。随蓮、階に登り上がりて見れば、上人北座に南向きに坐し給えり。随蓮見奉りて畏るに、上人見給いて、「これへ参れ」と召しければ、間近く参りぬ。随蓮いまだ言葉を出さざるに、上人宣わく、「汝がこのほど心に嘆き思うこと、ゆめゆめ煩うべからず」と。随蓮、このことすべて人にも申さず、何として知ろしめしたるにかと思いながら、上件の様を詳しく申すに、上人仰せられて云く、「例えば、僻事を言う者在りて、あの池の蓮華を、蓮華には非ず、梅ぞ桜ぞ、と言わば、信ずべしや」と。随蓮申して云く、「現に蓮華にて候わんをば、いかに人申し候とも、いかでか信じ候べき」と。上人宣わく、「念仏の義もまたかくのごとし。源空が汝に「念仏して往生することは、決定して疑い無し」と教えしを信じたるは、蓮華を蓮華と思わむがごとし。深く信じて兎角の沙汰に及ばず。ただ念仏を申すべきなり。あらぬ邪見の桜梅の義をば、ゆめゆめ信ずべからず」と仰せらると見て夢覚めぬ。随蓮、疑念残り無く散じにけり。念仏功積もり、臨終正念にして、往生の素懐を

称念のなかに三心自ら備わる

逐げけるとなむ。そもそも上人あるところには三心の様を詳しく教え、あるところには三心の沙汰詮無き由、仰せられたり。これ人によるべきことなり。名号を唱うれば、必ず往生すとばかり、忠実やかに馮みて唱うれば、その人の心に自から三心も備わりぬるを、中々に三心とて事々しく申しなすほどに、却りて信心を乱ることも侍るなり。かからむ人のためには、三心の沙汰無益のことなるべし。もし、日来は疑いの心も有り、三心具せぬ人も、聖教を学すれば、道理に折れて三心の起こることも有れば、左様ならん人のためには、三心の様を知らむも大切なるべきを、一向にこれを非せば、またその科有るべし。この筋を心得なば、上人両様の御勧進さらに相違を成すべからざるものなり。

〔第三段〕　詞書

遠江國久野の作佛房といひし山卧ハ、役行者の跡をおひ、山林斗藪の行をたてゝ大峯を経歴し、熊野参詣のあゆミをはこふ事四十八ケ度なり、たひことに證誠権現の寶前にひさまつき、われさらに現世の果報をいのらす、ねかハくは出離の要道をしめし給へ、とちかひけるに、四十八度満する時、當時京都に法然房といふひしりあり、ゆきて出離の道をたつぬへし、としめし給けれハ、すなハち上洛し、て、

上人に謁したてまつり、念仏往生の教導にあつ」かり、一向専修の行者となりにけり、本國にくた」りてハ、みつから市にいてゝ、染物なとやうのものを」賣買して、命をつくハかりことゝしけり、もとより孤」獨の身なれハ、同行もなく知識もなし、病をう」けされハ病悩のくるしみなく、療治のわつらひ」なし、往生の期いたりて、道場にいり、佛前にして」みつからかねをうち、高聲念佛数刻にを」よふ、小法師朝飡をとゝのへて案内しけるニ、」しハらくとて、なを念仏のこゑしきりなり、念仏」とゝまりてのち、また申おとろかすに、をともせ」さりけれハ、ちかくよりて見るに、本尊にむかひ、」端坐合掌す、そのかほゑめるかことし、さる」ほとに紫雲におとろき、吴香をたつねて」諸人雲集し、來縁をむすふ、奇特のことなり」けり、上人の勧化、神慮にかなえることかくのことし、」抑熊野山證誠権現ハ、本地阿弥陀如来なり、」いま神明とあらハれて、無福の衆生に福をあ」たえむとちかひ給へるも、せめて慈悲のあま」りに貪欲ふかくして、ひとへに今生の栄耀ニ」心をそめ、後生の苦患をわすれたる衆生の」人身をうけたるかひなくして、ふたゝひ悪」道にかへるへきともからをすくハむかための、」濟度の方便なるへし、されハ當山にまうてゝ、」後世ほたいをいのるひとハ、なかれにさほさすか」ことく、本願の正意にかなひて、かならす順」次の往生をとく、なとそ申つたへ侍る、九品の」鳥居をたてられたるも、九品の浄土に

引」接の御本意を表すといえり、参詣の人、」内にハ本地の本願をたのミ、外にハ垂跡の」擁護をあふきて、た、ひとへに順次往生」の心さしをさきとし侍るへきものをや、」

釈文

作仏房、熊野権現のお告げで、上人に帰依する

遠江国久野の作仏房といいし山臥は、役行者の跡を追い、山林抖藪の行を立てて大峰を経歴し、熊野参詣の歩みを運ぶこと四十八か度なり。度ごとに証誠権現の宝前に跪き、「我さらに現世の果報を祈らず。願わくば、出離の要道を示し給え」と誓いけるに、四十八度満ずる時、「当時、京都に法然房という聖在り、行きて出離の道を尋ぬべし」と示し給いければ、則ち上洛して、上人に謁し奉り、念仏往生の教導に預り、一向専修の行者となりにけり。本国に下りては、自ら市に出でて、染物など様の物を売買して命を継ぐ計り事としけり。元より孤独の身なれば、同行も無く知識も無し。病を受けざれば、病悩の苦しみ無く、療治の煩い無し。往生の期至りて、道場に入り、仏前にして自ら鉦を打ち、高声念仏数刻に及ぶ。小法師、朝飧を調えて案内しけるに、「暫く」とて、なお念仏の声頻りなり。念仏止まりて後、また申し驚かすに、音もせざり

念仏のうちに往生

熊野権現の本地は阿弥陀仏

九品の鳥居

ければ、近く寄りて見るに、本尊に向かい、端坐合掌す。その顔笑めるがごとし。さるほどに、紫雲に驚き、異香を尋ねて、諸人雲集し来り縁を結ぶ。奇特のことなりけり。上人の勧化、神慮に叶えることかくのごとし。そもそも、熊野山証誠権現は、本地阿弥陀如来なり。今神明と現われて、無福の衆生に福を与えんと誓い給えるも、せめて慈悲の余りに貪欲深くして、ひとえに今生の栄耀に心を染め、後生の苦患を忘れたる衆生の人身を受けたる甲斐無くして、再び悪道に帰るべき輩を救わむがための、済度の方便なるべし。されば、当山に詣でて後世菩提を祈る人は、流れに棹さすがごとく、本願の正意に叶いて、必ず順次の往生を逐ぐなどぞ申し伝え侍る。九品の鳥居を建てられたるも、九品の浄土に引接の御本意を表わすといえり。参詣の人、内には本地の本願を憑み、外には垂迹の擁護を仰ぎて、ただひとえに順次往生の志を先とし侍るべきものをや。」

〔奥書〕

二十巻折帖数廿二丁

四十八巻繪傳　知恩院

常任